S C A N D A L O.U.S

久遠尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ　Ｃ　Ａ　Ｎ　Ｄ　Ａ　Ｌ　Ｏ．Ｕ．Ｓ

【Ｎコード】
Ｎ３８９３Ｉ

【作者名】
久遠尊

【あらすじ】
１８年前、バブリーな頃の横浜。ボーイミーツガール☆

前編（2／4）

◆1991年　5月◆

ドサッ
「なるべく早く、返すから……」
警官から銃を奪う。スムーズに事が運んだ。
（これ以上、関係のない他人は傷付けない……）
これで準備は整った――。

◇1◇　岬

「岬ちゃーん！　レジッ！」
「ハーイっ！」
神奈川県庁が見える辺りに位置する、喫茶、ふりむけばヨコハマ’は、いつも忙しかった。振り向かなくても横浜テレビ局やなんやかんや、――常連客が多いからか。
常に良い、珈琲の薫りが立ち込めている。高校時代からバイトしていて、卒業後にフルタイムで働き始めてから、もう一年が経った。
※
お給料日の夜。バッグひっくり返して探してるのは、お金じゃなかった。
（無い！　無いっ！　どこいっちゃったのよ～）
墓場まで持っていく筈の、命より大切なマイブックが見当たらなかった。私のジュネ小説の――耽美派とはいえ――見られたら恥ずかしいネタの走り書きが渦巻いてるのに、だ。
（死ねない……！）

帰宅してからずっと探している。今朝、全ての作品を投稿した私。身辺整理も終わっていた。
私は、半年計画で自殺の準備をしてきたのだ。‘今日’が、その予定日だった。冥土の置き土産にと――少ないお給料をパパに渡したあと、この世とは綺麗さっぱりお別れするつもりだった。
そのパパ、夕方帰宅してもやっぱりいない。今日も元気に仕事をサボって、野毛商店街ジャズ祭実行委員と称して、ドルフィーに生息してるんだろう。もう、住んでると言ってもいいのではないだろうか？
「商店街の未来を見据えて、年二回の祭を開催するんだ！」
て、そりゃあ雨天決行が出来ないものね、年二回くらい予防線を張っといた方がいいでしょうよ、もっともよ。
「中学の頃に、オスカー・ピーターソンを聴いて以来、ピアノを独学したんだぞっ！」
そんな事、私に関係ないっ！　ちゃんと毎日仕事をしてほしかった、あの頃みたいに。

※

理容室‘ドリーム’に、一人娘として生まれて、十九年。
私を本当に愛してくれたのは、中三の一年間付き合って、敦賀に転校して行った佐倉クンだけ。去年の秋、風の噂で彼が事故死したのを知っちゃった……。いろんな後悔で、鬱々と暮らしていたら、佐倉クンのお母様から小包が来た。
転校したら、人気者の彼だもん。福娘と花換えしたら、一目惚れされて、さっさと彼女作っちゃうよ――とか考えて、連絡を怠った私の馬鹿馬鹿……バカッ！
（だって怖かったんだもん！）
佐倉クンの、投函しなかったラブレターが山と来た。もう、泣いた。――泣き疲れた私は佐倉クンの元へ行くことにしたのだった。
（だって、学校にすら行けない――。ひとりっ子なのに……）
元々、家族はあんまり好きじゃなかったし、女友達も親友みたい

に呼べる子はいなかった。まあまあ話せるのは、幼馴染みの隼人くらい？
　でも、隼人も高校からこれまた幼馴染みの京と付き合い始めて、あんまり腹割って話せなくなっちゃったし……。
なぜなら、お嬢様の京は、昔から私の事が嫌いなのだ。何でなんだろう。私は京んち‘Ｗｈｉｔｅ　ｆｅａｔｈｅｒｓ’のケーキ、大好きなのに……。
　私、嘘つくの上手い気がするけど、嘘つくの好きじゃないから結構本音で話しちゃう。
（そこが、デリケートなお嬢様タイプの京には、アクが強すぎるのかな～？）
　でもママに対しては、結構秘密主義な方だったかも。反抗期以降、あんまり話さなくなったのもあるけど、基本ママはどんくさい。よくも悪くもどんくさい。あんまり恋愛ネタとか、私のコンプレックスについては、いいたくないから絶対いわなかった。
（そのせいなの……？）
　そうとは思いたくないけど、一昨年、ママが出て行った。それからパパの仕事放棄っぷりは、家計の火の車に拍車をかけた……。
「もう、疲れちゃった……」
　ちょっと、寝よう――。

◇2◇　セシル

（なんだ……、コレ？）
　『ｐｒｅｓｉｄｅｎｔ』の関係者三人と、ランチの為に、昔ながらの日本らしい喫茶店に来ていた。小柄なウエイトレスがメニューを置いていったのだが、俺のだけ二枚重なっていた。それは小型の、薄いノートブックみたいだった。
　俺はキーカフェ『ｐｒｅｓｉｄｅｎｔ』のＣＭ出演の為にＯ．Ｕ．――オックスフォード・ユニバーシティから派遣された学生だった。

本物の学生で、本物の品質を表したいとの事だった。
お祖母様が理事を務めていたから、推薦されてきた……という形をとっているが、実は本国から逃げてきていた。――もう、戻らない覚悟で。
「――私はCランチにするわっ。セシルはどうする？」
スタイリスト兼現場コーディネーターの浅間さんが言った。
「……あ、俺もそれでコーヒーお願いします」
「じゃあ、Cランチ二つホットコーヒー、以上で」
「かしこまりました」
俺はイギリス人の父と日本人の母のハーフだから、幸いな事に日本語も堪能だった。だから日本に来たのだ。
ところで（浅間さんに見つかったら、面倒だから）膝に置いたノートブックは、今のウエイトレスの物なのは明白だったけど、内容を察するに後でこっそり返した方が良さそうだった――。
※
「あ」
男性はあらかた食べ終えた。後は浅間さんだけだった。
（キーカフェのが美味いなァ）
ぼんやりコーヒーを飲みながら、外を見ていた。小柄なシルエット。私服姿になった彼女が帰ろうとしていた。
「う……あ、すみません！　ちょっと今日は失礼します。また明日っ」
「セシル君？」
「ちょっとー！　セシル～？」
後ろから、浅間さんの呼ぶ声がしたけど気にしない。
※
横浜、桜木町の第三セクター「みなとみらい」建設予定地の反対側。野毛商店街、音楽通り――。
「このへんも、ガス灯の聖地かァ……」
あのノートブック。半分ネタ帳で、半分日記だった。走り書きだ

ったけど、元の字が丁寧なのか、読みやすかった。一つ物騒な絵があった。首つり縄の、丁寧な結び方だ――これもネタだろうか？
ガス灯を見ながら、彼女の家を通り過ぎたら、洒落たケーキ屋を見つけた。
（レディの家には、手土産を――）

◇3◇　岬

佐倉クン！　久しぶりだね。ここどこなの、素敵なお花畑ね？
あの頃、お互い悪戯の連続。それを愉しんだ、幼い毎日だったのになんでも許せた、何でなんだろう――。
え？　そっち行っちゃうの？　じゃあモチロン、私も行くよ？
――あの時は無理だったけど。
（ではさようなら、この世――）
「じゃなかった！　早くアレ、見つけ出さなきゃっ！」
ガバリッ
勢いよく、しなびた布団を捲って起きる。どうやらいつの間にか、しっかり包まっていたみたい。
（こんな布団でも、冬は神様みたいなんだから、不思議よね～）
ピンポーン……ピポピポピンポーン……♪
「な、何事っ？」
※
「うるっっっっっっッさい！」
暗闇の中、背の高い彼の髪は亜麻色で、眼は鳶色だった。眼鏡要らずな私は、目が良かった。見つけた、マイブック！
「届けてくれたのねっ！　ありがとう！　これで心置きなくし――」
流石に物騒な言葉は控えたい――死に際の乙女として。
手を伸ばす。
ヒョイ
返して？　のポーズで、首を傾けてみる。

「ンー、どうしよっかなー？」
「……返してっ！」
「んーン？　俺は君の命の恩人だよ？　その言い方は、ないんじゃないの～」
「誰も頼んじゃいないわよっ！」
私はノートをひったくった。中を確認する。
「～～～～！　ちょっと、ホンモノはどこいったのよっ！」
「俺の懐。ちゃんと大事に持ってるよ」
「か・え・し・て！」
「返してあげる代わりに、付いてきてよ。世界旅行中なんだ」
「はぁ？」
「君、名前は」
「岬。咲く方じゃなくて、海の方の……」
「ミサキ！　――いいじゃん、もうこんな所イヤなんだろ？　俺も男所帯じゃエレガントじゃなくてイヤなんだ。付いてきてよ」
（ワッケわかんないっ！）
「三食、保証する。……パパには置き手紙でもしとけばイーじゃん？」
なぜか、京んちの焼き菓子ギフトをずずいと渡された。
（“保証”……。――なんてイイ響きかなっ！）
意味不明。でもこれ以上悪いシチュエーションは、思いつかなかった。内蔵目当てだとしても、そういう運命だと悟る――瞬間的に。
「――わかったわ。五分、時間を頂戴っ」
まるで魔法にかかったように、さらさらと三行半。

パパへ
いままで結構大変な生活だったけど、パパの事は最後まで、キライじゃなかったよ。
でもゴメン。一世一代。世界を見せてくれるっていう（危ない？）誘いに乗って、私は旅に出ます。

育ててくれて、ありがとう！　　岬より

あら、二行半。お給料袋と、サブレは放置。だってもう、必要ないし。

死を覚悟した者に、怖いものなんてないのだ――。

※

「夢は、作家かスタイリストか？」

ドキリ――って全身に、リアルに響いた。

「……！　なんで分かったの？」

「――ネタ帳を持ってるし。登場人物の容姿が色の指定まで事細かだ。君みたいなインディペンデントなタイプは、好奇心旺盛だから、夢の二つや三つ持っていても、おかしくはない」

「はー、すごい。あんた、何モノよ？」

（そういえばまだ、名前も知らないじゃない……）

目の前に、

「ハイこれ、ＩＤ」

学生証みたいなものを見せられた。

《ＯＸＦＯＲＤ　ＵＮＩＶ．》って書いてあるようだった。

（――え、見間違いよねっ？）

◇４◇　ギムレット

貧困の中。オレは唯一本当の家族である、シェリーだけが心の拠り所だった。――シェリーを愛していた。

ギムレットとシェリー。そんな名前の兄妹。本当の名前なんて知らない。ジョン――そこの亭主が、酒飲みだったからだろう。

物心ついた時にはアメリカの片田舎で、優しくもない農民の夫婦にこき使われていた。

その夫婦に子供は居なかったが、一財産ある婆さんを一人飼っていた。その婆さんがオレ達を育てるよう指示したらしいが、――別

に慈悲からではなく、人手不足を補う為だった。また、持病の腰痛の世話をさせる為だったかも知れない。
ともかくオレ達は毎週、多いときは週に二～三回は婆さんを近くの病院に連れて行った。本来なら、婆さんがまだ少しは可愛がっているシェリーだけで良かったのだが、有事に備えていつもオレも行かされていた。
オレが十歳位で、シェリーが九歳の頃だろうか。婆さんの診察待ちをしている間に暇を持て余したオレは、その頃しょちゅう、空いている診察室に忍び込んでは、いろんなものを盗み見したりしていた。そしてある日、その部屋の医師にバレた。
オレ達兄妹、人生最初で最後の幸運期は、この中国系の年若い医師――ジョージ・スタンフォードに出逢えたことから始まる。

※

オレ達はどういった両親から生まれたのか、ほとんど東洋系の顔立ちをしていた。東と西、3対1位の雰囲気。少しだけ彫が深い。髪は黒っぽく、眼は灰色で、肌は白い。シェリーの綺麗な糸みたいな長い髪は、オレが毎日ひとつに編んでやっていた。
ともかく、そんな見た目に興味を示してくれたのか、ジョージはオレ達に勉強を教えてくれた。することがなかったせいか、遺伝なのか判らないが、オレ達はそろって物凄く勉強ができた……らしかった。
その頃、少しずつ女性らしく成長しつつあるシェリーを見るジョンの眼が気になり始めていたオレは、ジョージに助けを求めた。そしてジョージは、すぐに手を打ってくれた。
オレ達兄妹を、引き取ってくれるということだった。
ジョンや婆さん達には、「優良遺伝子の才能を伸ばす、その研究の為」と、研究費まで払ったらしく、その問題は平和的に解決された。
ジョージのお陰で、ジュニアハイスクール以降は中流家庭の子供のように学校に通えたし、オレ達は恩に報いる為、一生懸命勉強し

た。自分の生い立ちが気になり始めた頃は、東洋史や東洋の語学も一通りマスターした。
やがて、オレ達は創設されたばかりの、ローズ奨学制度の第一期対象者に選ばれた。その頃のオレはフェンシングの国際大会で入賞経験があったし、シェリーはボランティア活動や、ホーティカルチュラルセラピーの実践に基づく論文等で注目を集めていた。
そして、揃ってオックスフォードへ行けることになった。――最期の時になるとは知らずに。

◇5◇　ギムとシェリー

どう考えても、シェリーはセシルに惹かれ始めていた。
「ね、ギム！　さっきの人、変わった人だったわねっ」
「ああ」
「いきなり、『メーン！』って何かしらねー。ちょっとだけ、フェンシングに似ていたわ」
「……あれは剣道だろ。東洋史のなんかで見た」
まさかオックスフォードでサークルの勧誘めいたものがあるとは思わなかった。――しかもいきなり人に剣先を向けるとは、失礼この上ない人物だとしか思えなかった。
「シェリー。オレ達は勉強しに来たんだ。ヘンなクラブに入ってるヒマはない」
「あら。でもおにいちゃん、私達、やっと自由になれたのよ？　それにこのクラブ、ちょっと面白そう！」

《ヘブンリー・クラブ》

◇週一回の天体観測。
◇月一回のローマ神話の読み解き、及びパーティーを催す。
主催◇（星の名づけ親になりたい男）セシル・ローズ

問い合わせ◇ローズハウス管理課

※

あんなにそっけないビラだったのに、シェリーは入ると云ってきかなかったし、セシルの噂はすぐに耳に入った。
どうやら、セシルのお祖母様、ドロシー・ローズはここのクライスト・チャーチ・カレッジの元学生監らしい。そして遺言により、ローズ奨学制度を創設した、オレ達にとっての女神だった。
彼女はダイアモンド鉱山のお嬢様育ちで、幼い頃から文学に触れて育った、このオックスフォードに来るべくしてきた存在だった。晩年に、放浪から戻ってきた息子が連れて来た、孫セシルは日本人とのハーフで、それは驚いたという。
息子の放浪生活の感想を聴いたドロシーは、各国の貧しくも優秀な若者達に門扉を開こうと、奨学制度の充実を遺言に記したらしい。
……まあすべて、噂とリーフレットで知った事だ。
とりあえず、同い年のセシルという男は、第一期のエリート三十名余を、まとめて面倒を見る気だったらしく、全員を見事ヘブンリー・クラブに入れてのけた。
なにより、「星の名づけ親になりたかった」のは、ロマンチストなドロシーだったらしい。つまり、お祖母様っこだったセシルは、その夢までも受け継いだのだった。

◇6◇　シンデレラ

牡蠣なんて豪勢なもの、見たこともないのに！
二月三月だけで、ノーウォークウイルスに二回もかかって、上に下に出ちゃうし、ブザマだし、辛かった。お医者様曰く、ディズニーランドみたいな人込みは、経口感染しやすいらしい。
でも！　シンデレラブレーションっていうニューエンターテインメント、見たかったんだもん！

さっきの彼女のノート。……思い出すと、声を殺せない。
「どこ行こう……、行きたいとこない？」
「……なんで笑いながら聞くのよっ」
身分証明をしたものの、まだ不審気に思われているらしい。
「いいじゃないか、今からでも行こう」
「どこに？」
「好きなんだろ？　ミッキー♪」
「……夕方から、それだけの為に行くなんて、――そんなゼータク出来ないわっ！」
なるほど、貧乏が身に着いているらしかった。
ホリデーらしく、ロータリーは賑々しかった。横浜の駅前にも、物待ち顔な男女が溢れていた。みんな、夜会に行くような格好をしている。岬のシンプルイズベストとは、大きな違いだった。
（ふうん。これが日本の現状か――）
「いっそ、今日は金を使おう」
「は？」
「タクシー！」
俺自身は別に金に困ったことはない、けど、彼女に一夜くらい、日本人の普通っぽさを味わわせてみたかった――俺の気まぐれで。
今日はホリデーだから、都心じゃないけどひどい混雑だった。俺は周りを見習って、札を手に取ってみた。ヒラヒラ。
「ヘイ、こっちだ！」
たまたま財布から、二万抜き取ったらしい。ドライバーは、俺を選んでくれた。
「岬、行こう」
「ちょ、タクシーなんて、一体いくらかかんのよ～！」
岬の叫びなんて、気にしない。
※
一時間かからずに、到着した。シンデレラのタイムリミットに、間

に合うだろうか――？
「岬！　シンデレラは何時にやるんだ？」
「えっ？　一九時よ、確か……。やっと見られるの、嬉しいなっ」
そうか、よかった。
「アレにでも、乗るか？」
スカイウェイ。俺はロープウェイが好きだった。
「いいわねっ」
※
（やっぱり、日本でも例にもれず……か）
「シンデレラッ、素敵だった……。セシルありがとう！」
「ん？　ああ、良かったな。ディナーどうしようか？」
「え、こんだけゼータクしたもの。――私、おにぎりでいいわよ？」
「ハハ！　握ってくれんのか？」
「構わないわっ」
俺達は、ゲートを出ようとしていた。
「そこまでだっ！」
（――不味い、逃げられない！）

◇7◇　その夜

「――はー……やっぱり、びっくりした～」
「スミマセンてば、岬～」
「――だって、怖かったんもー」
「んもーってなんだよっ、ミサキ！」
「うっさい、コハク」
一気に賑やかになった。よく分かんないけど、シュリが「セシル・ローズのボディガードです」って言ってたから、ボディガードなんだろう。ぶっちゃけ、セシルの方がまだ、ガタイが良いくらいだけど。
細身のセシルより――更に絞っているのか、珠璃も琥珀も本当にス

レンダーだ。シークレットサービスらしくダークスーツだけど、とてもスタイリッシュに映る――そんな兄弟だった。
「それにしてもー、セシルッ！　オマエ、オレ達の仕事増やすなよな。珠璃なんてずっと心配で、胃を痛めてたんだぞっ！」
「琥珀、余計なことといわないのっ。セシル、いくらつまんなくても、ボク達を撒いてたら、命が幾つあっても足りないよ？」
びっくりした。ネタじゃないらしい。セシルって、要人かなんかなのだろうか？
「ごめん、クラウンズ……でも俺、元々自由人だから、見張られてると息がつまるんだよ……」
「オマエがそーいうから、距離とって見張ってんだろーがぁ！」
「落ち着けって――。セシルいい？　もう、赦しませんからね？」
「ハイ……」
それにしても、兄弟揃って日本語がほぼ完璧だった。
「日本語、すごいね～」
「ああ、ボク達は、日本に住んでたこともありますし」
「空手も習ったぜ！」
「ホント？　すごいな～」
いいな、いいな。英才教育かな？
「マリーン・コーアに居たこともあるんだぜっ」
「何それ？」
「簡単に言うと、アメリカの軍……あ、そろそろ珠璃に怒られる……」
急に口を噤む琥珀。珠璃は、物腰柔らかそうだけど、怒ると怖いタイプかな？
※
セシルはヒルトン暮らしだ。ここが好きなんだそう……大したお金持ちだった。私のパスポートが発行されるまで、日本からはでないらしい。
目が冴えて、なかなか寝付けない。セシルの部屋に乱入していた。

「岬って結構背が高いよなァ」
「あ、わかる？　これでも中学で１５センチ伸ばしたのっ」
　セシルが笑いをかみ殺していた。
「……ハ～ン。そうですよねー。１８０以上はゆうにありそうな人からみれば、１５８なんて大きい内に入らないわよね～」
「ププ……何そのクチ……」
セシルは既に、ほんのりと涙目だ。
「フンだ！　アヒルよ。ア・ヒ・ル！」
「アハ……ハハハハハ！」
失礼な位笑いのツボにはまっている。
「笑いすぎよっ！」
「岬ィ？　せっかくのナデシコロングが、ちょっと傷んでるぞ」
私がかきあげた髪のひと房を、手に取られていた。
　それはトリートメント節約の為、ちょっと所ではなく大分傷んでいた。
（こういうトコ、プチフェミニストなんだから……）
「ん……。ママが家出てってから、お気に入りのシャンプー会社と商談つかなくって、あんまりちゃんと手入れしてないのよ」
「ダメだよ！　髪はレディーの命だろ？」
「だって……」
（お金も。暇も、無かったもん……）
「いいから、俺のママのハーブトリートメント、してやる！」
グイグイとバスルームに追い立てられた。――それは、おかしなシチュエーションだった。
　服を着たままバスタブに入って、頭だけ出してシャンプーをされた。――さっき自分でやったばかりなのに。
「痒いとこは、無いよね？」
「うん大丈夫よ」
「じゃあ流すよ」
　かなり優しく洗ってくれているのが分かる。まるで、セシルの方

が本職みたいだった。
「キブンは？」
「最高っ！　このままトリートメント？」
「うん、ラッピングもしてあげるよ」
「準備イイね？」
「あ～……。少しだけ言っておくケド、ちょっと追われてるのは本当なんだ。だからこのベースには、割となんでも揃ってるよ」
「へえ？　そうなんだ」
（ちょっとって事なら、ストーカーとかかしら？）
まあ、セシルは緩い癖毛さえも画になるタイプだから、仕方がないと思った。

◇８◇　ヘブンリー・クラブ

「ハイみなさん！　この後十八時にディナーの予約入ってるから、着替えたらレストラン、ジーズの温室前に集合ね！」
今日も元気に、青空の下、セシルが声を張り上げていた。
あいつの素晴らしい（アンチセシルのオレには、拷問か宗教だが）、ローマ神話の読み聞かせが、やっと終わったところだった。
「――セシルさん、かっこいいわ」
「どこが」
「ギムだってかっこいいわよ？　お月さまみたいに。でも、セシルさんは私達とは違う。……太陽みたいに、能動的な明るさがあるわ――」
私達とは違う――とても的を得ていた。特にオレとあいつを比較するあたり、その通りだった。
ここまで来たからには、将来は政界入りをも視野に入れて、勉強に励もうと思っている冷徹なオレ。
一方、周りに愛されて綺麗な精神に生まれ育ったセシル。
（ああ、もう。また懐かれてる！）

最近セシルに異様にくっついているカナダからのエリートがいた。ジョンだ。――そう、またしてもオレの視野にジョンという名の目障りな奴が現れていた。
大柄なジョンの見てくれはまあまあで、それなりに女も寄ってきそうなのに、オレの目には、奴は同性愛者にしか見えなかった。
（セシル、さっさと振ってやれ！）
「セシルさーん！」
そう念じていたら、何故かシェリーがセシルの元へ行った。
（シェリー！　バカッ！）
最近、ジョンがシェリーの事を物騒な眼つきで見ているのに気づいたオレ。すかさずシェリーを回収にかかる。
「シェリー！　いくぞ！」
「ギム！　私、レストランにはセシルと行くわっ！」
「ダメだ！　――オレも、一緒に行く、早く着替えてこい」
「はぁい……」
項垂れるシェリー。別に恋路を邪魔するわけじゃない――。
シェリーがローズハウスへ消えた後、セシルが寄って来た。いつの間にか、ジョンの姿はなかった。
「ギム。困ってたんだ、ありがとう！」
オレは少し上を見据えて、静かに言い放つ。
「セシル、早くおまえの信者を開放してやれ！　――でないと、危なすぎてシェリーは渡せない……」
「……シェリー、他所に、くれる気あるの？」
「お前なんか嫌いだ。でも、アタマと将来は有望だ。――シェリーの為なら、ここらで許せる」
「ひどいなー」
「つべこべ言う前に、本気でジョンをどうにかしろ！」
「了解っ」
※
シェリーがローズハウスへ消えて、ジョンもすぐにローズハウス

に戻って行った。皆も着替えに行ったらしく、そこにはギムレットだけが残っていた。
「ギム。困ってたんだ、ありがとう！」
常に凛とした佇まいのギム。静かに怒っているようだった。
「セシル、早くおまえの信者を開放してやれ！　――でないと、危なすぎてシェリーは渡せない……」
（意外だ――）
「……シェリー、他所に、くれる気あるの？」
俺は最近、ジョンがシェリーの事を気になっている風なのに、気づいたところだった。
「お前なんか嫌いだ。でも、アタマと将来は有望だ。――シェリーの為なら、ここらで許せる」
「ひどいなー」
（ギムも気づいたんだ！）
ジョンの事、ギムも一応許せるらしい。俺への暴言なんて、気にならない。
「つべこべ言う前に、本気でジョンをどうにかしろ！」
「了解っ」
とりあえず俺への心酔をどうにかして、普通の一男子に戻せばいいんだと思っていた。

◇９◇　‘真実へのキー’

「今日は仕事があるんだ」
「お仕事？　なんの？」
「ＣＭ撮影」
「え。セシルってやっぱモデルだったの？」
「ううん。フツーの大学生だよ」
（オックスフォードの、どこが‘フツー’なのよー）
軽く髪を撫でつけ、桜色のワイシャツを着たセシルが、ネクタイ

を結ぼうと悪戦苦闘していた。かまわず代わりに結んでやる。それは大判な薔薇柄の、くすんだワインレッドだった。
何か手にあたる、――ボタンが一個開いていた。
「セシルのペンダント、すっごく綺麗ねー。ガーネット？」
「キレイだろ？　俺の大学祝いに、お祖母様が下さったんだ！」
「リッチなお祖母ちゃんね～。とっても大粒！」
惚れ惚れとするような輝きだ。――ガーネットは私の誕生石だった。
「ガーネットなんだけど俺の誕生石でもあるんだ」
「あら偶然。私もよ？」
「そうかァ。……着けてみる？」
一緒なのがそんなに嬉しかったのか、急ににこにこしだした。
「よしとくわ、相応しくないし」
そう言うと、ちょっとだけ残念そうだ。
「これが衣装なの？」
茶のズボンに合わせるように、今度は茶のベストを着こんでいた。
「昨日スタイリストにあててもらったんだ」
「へえ――」
元々ノーブルなセシルだ。けれども、こういう格好をすると、正にプラチナ‘ゴールドカラー’という感じだった。
※
コーヒーの新ブランド、『ｐｒｅｓｉｄｅｎｔ』のＣＭ出演の為に日本に来たという。キーカフェは、高貴なイメージ且つ正式な発音で日本語を話せる‘プレジデント’、そんな存在を探していたそうだ。
私も撮影場所に連れてきてもらった。
横浜・ホテルニューグランドの、マッカーサーズスイートだ。家まで近かったから、少しだけノスタルジーを感じる。
（こんな事がなければ、一生足を踏み入れなかったわね……）
珠璃は、「ちょっと気になることがある」と調査に出かけ、琥珀が

私と残っていた。
「――セシルの彼女？」
先程紹介されたばかりの、現場コーディネーターの浅間さんが言った。セシルはもう、セットの中にいる。
「え、……違いますよーっ」
手を顔の前でパタパタする。
「なーんだ、つまんない。あんなにパーフェクトだから、彼女も出てくりゃ『パーフェクトに、セシルらしい！』って思ったのにィ……」
表情がコロコロ変わる、面白い女性だった。さっきの、指示をキリキリ飛ばしていたのとは大違いだ。
「えー……。私、セシルの彼女っぽいですか？」
「なんかね～、ヘタにパツキン碧眼の美女よりも、‘らしい’気がしたのよー」
「あー、美人じゃなくて新鮮！　……みたいな？」
ちょっと自虐ネタが出始めていた。
「ん、なんかね～。シンプルに‘生きてる’ってオーラかな？　私一応、売れっ子スタイリストだからさァ、解るのよ。今風に流されない、レディライクな純粋な～。とりあえずこのストレートなツヤ髪がいいわねっ！　――あ、行かなきゃ。そこのポットの奴は、飲んでイイ用だからっ！」
言うだけ言って、行ってしまった。
（――ふしぎね。悪い気はしないのよ、私……）
ありがたく、ポットのコーヒーを頂く。カップは備え付けのノリタケ――花柄を選んだ。
（よく見たら薔薇だわ、ゼータク！）
もう、素直に愉しむことにした。
昨日は瀬戸際だったから曖昧だったけど、半年前に本気で、一度死を選んだのだ。
（‘無’になる筈だった……そう思えば、今の幸せはシンプルに甘

受すべきよね？）
「岬っ！　俺にもくれよ」
「……ハイハイ」
部屋中を観察していた琥珀が、飽きたらしい。
「……なんか、岬って瑠璃みたいだ……」
微かな呟きだった。でも、さっきの事もあって思わず訊いてしまう。
「なーにっ。琥珀の彼女？」
顔がニマニマしちゃう。
「ちげーよ、――愛すべき妹だ」
「妹サマ！　さぞかし珠璃似の美人でしょうね～」
普通にはぐらかしたら、頭を軽くはたかれた。
「イタイよー、乱暴者！　せっかくのブローが崩れるじゃないっ」
昨日せっかく、やってもらったのだ。
「……二個下だから、ちょうどオマエ位の姫だ……。ついでに教えといてやると、俺達のターゲット、ギムレットは瑠璃を瀕死に追いやった――赦さねぇ……」
自己完結して、グイッと飲むと、どこかへ行ってしまった。
（えっ、……え？　早くてよく分かんないよ。ターゲットって、追ってきてる人の事？　ギムレットってお酒の名前？）
「ハイ行きまーす！　4・3・2……」
張り上げた声をきっかけに、場がシンとなる。気にはなったが、私もそちらに注目した。

木漏れ日溢れるクラシカルな部屋。アンティークの机の上の、上質なコーヒーカップには最高のコーヒー。テーマは、《真実へのキー》。
画面右手から茶系のスリーピースに身を包んだ西洋風の男性が一人現れて陽のあたる方へ。その手には、コーヒー入りのグラス。――机の上のは、誰のもの？

すぐに、窓際の男性が振り返る。アイスコーヒーを飲む。この間5秒は、アップから全体へと引いて行く。
「いろいろあったけど、貴女に決めた――」
手タレさん登場！　カップに伸ばす左手の薬指には、キラリ、ダイヤモンド。――そういえば、先程も見たよなぁ……というCMだった。

（なにこれ……！）
一回目、気合入ってるのか……先程の台詞。眼が合っていた。まだまだ、続く本番――リテイク。
貧困な私の脳は、何故か自分が選ばれたと錯覚したようで、軽くパニックを起こしていた――。

※

どうやら今日は、‘此処’に宿泊するらしい。マッカーサーか、すぐトナリか、どちらがいいかと聴かれた。
（マッカーサーは高そうよね……）
あまり変わらないかもしれないが、‘トナリ’と答えた。
正確には隣ではなかったらしく、同フロアの318号室だった。ある作家が、十年過ごした有名な部屋だった。
「今日は同室。後でベッド来るから」
ちょっとドキリとした。顔が熱い――部屋の電気を点けてなくて良かった。
「そ、か……。ここだったのね、鞍馬天狗――」
部屋から、外を見た。セシルが近付いてきた。
「知ってるの？」
「パパが好きだったのよ、次郎は……ヒーローなのね」
「ああそうか。――俺はこっち選んでくれて、嬉しかった」
「なんで？」
「次郎の兄の抱影は、星に詳しい文学者だ。星の研究家で、テンブンガクシャなんだ。俺の、ヒーロー？　みたいな」

「ふうん？　星が好きなの？」
「――いつか、惑星を見つけて名づけ親になりたいんだ」
「へえ、いいな、そういうの」
「そうか？」
セシルがとても、嬉しそうに笑ってくれた。
「これやるよ」
「なあに？」
セシルが襟元をごそごそやっていた。もしかして？
「ハイ」
「……いいの？」
麗しのガーネット、その傍らにはダイアモンド。雫形を描くローズゴールドのフレーム部分にも、繊細な装飾が施されている。
夕闇でも、とてもクラシカルなペンダントだった。
「ヤマトナデシコな黒髪に、きっと似合う」
「そんな」
「かして。着けてやるよ」
カチ、という音とともに、デコルテに軽く沈んだ。――まるで、存在を示すように。

◇１０◇　バイナリー

まだ少しだけ、迷いはあった。……でも。
「いろいろあったけど、貴女に決めた――」
そう言葉にすると、なんだか自分にもしっくり当てはまる気がした。
※
俺の懐には、いつもＢｉｎａｒｙ　ｓｔａｒ――連星があった。
「これやるよ」
「なあに？」
いつか気に入った女性に、あげようと考えていた。

「ハイ」
手渡す。ゆるゆると、大事そうに眺める岬。
「……いいの？」
ガーネット、寄り添う、天然ダイアモンド。優美な、ティアドロップ。
「ヤマトナデシコな黒髪に、きっと似合う」
「そんな」
「かして。着けてやるよ」
カチ。存在感が膨れ上がる。
バイナリースケールで、岬に傾倒している俺がいる。
「見て。これ、お祖母様のデザインなんだ。ティアの中にはガーネットと、それを支えるダイアの、バイナリースターなんだ」
窓に映っていた――。きらきらしていた。
「……好景気の日本も、いずれ終わるな。……俺は人魚になる気はないけど、一人は寂しい。――ついてきてくれない？　これから先も」
岬の眼が、驚きを隠さなかった。話をすりかえる。
「なんてな。ギャグだよ」
「――お祖母ちゃん、好きなんだ？」
「ママもパパも好きだけど、お祖母様にはかなわないね！」
「……いいわね。――私は、どうだったかなぁ……？」
「家族が、キライなのか？」
「もう知ってるかもだけど……、あんまりほっとかれすぎて――よく分かんないわ」
岬が溜め息とともに、顔の前で指を組んだ。
「……それはよくないよ……。岬、明日一度パパに逢ってこいよ。別に特別な事は、いいよ。でもちゃんと顔を合わせて、俺と行くか、決めてほしいんだ」
「セシル……」
路頭に迷う――そんな顔だった。可哀想になる、守らなければ。

※

正直を言えば。

俺は、‘優しさ’から、何か行動をしたことがあっただろうか――？

無駄に回転の速い、この頭のせいで。物心ついてから常に、先を読んで計算していた気さえするのだ。

もちろん。家族の愛情や、恵まれた環境に置かれていたことが多かったから、まっすぐ育ってこの俺が出来たというのも正しいだろう。

でもやはり、拭いきれない――。

俺は何かをいつも少し、吐き違えている。そんな感覚。――気づかなければ良かった。

でも、残酷な現実は真っ向からやってきた。

俺は幸か不幸か、周りから‘優しい’と思われやすかった。俺は――無意識下とはいえ、恐らく‘計算づく’なのにだ。

本当に‘優しい’訳でも、他人に対して思いやりがあるわけでもない――ましてや恋心なんて覚えた例のない――ただの、オックスフォードにいる、ひとりの学生だった。

だから、自分の些細な勘違いにも気付かなかったし、ヒトの持つ感情のレベルの強弱……みたいなものに、気づけるはずもなかった――まるで意識していなかったから。

ジョンとシェリー、ふたりの自殺が、俺に圧し掛かった。当然だ、気づけなかったし、気づこうともしなかった。

今なら、‘なんでお前はそうなんだ！’って自問出来るのに――重すぎる代償だ。

俺が死んでどうにかなる話ではないが、生きていても変わらない気がした……だから、父の依頼でクラウンズが来たときも“俺は護らなくいい――代わりにこの先事件が起こる時、俺に巻き込まれる不幸な‘他人’を護ってほしい”と頼みこんだ。すぐに、その通りの

事が起こった。俺を憐れんだ、瑠璃だ。彼女は、俺を庇った――。
もう、俺はどうすればいいか分からない――気がする。俺に纏わるふたりが死に、ひとりは一時瀕死に陥った。守られた命、俺が自ら絶ってはいけない気がするし、このまま生きていても、また誰かを巻き込みそうな気がする。
でも、出逢ってしまった。――俺と同じくらいの、死にたがり。すると今度は、少しだけ。――生きたくなった。
一体どういう反応なのか、これは。
死にたがりの彼女。同じく死を考えた俺には、彼女が、本当に、死にたかったのだと察することができた。しかしながら、彼女は律儀らしく、……俺を選んだあの、最期、まで、きちんと綿密に生きていた。
そして、本当に彼女に失礼なことに、俺は尊い彼女の命と、俺のお粗末な命を同一視した。
「死ぬところを、拾ったんだから。いつ道連れになっても、不平はないだろう――」
そう、思っていた。人権無視も、いいところだ。
そして迂闊な事に、俺は岬に潤いをもたらされていると気づく……やっと。
遅すぎたそれ。もう手放せないし、手放す気もなかった。

ようやっと、俺は岬を《全力を持って守る》という結論に達した。具体的に何をどこまでするかは考えてはいない。――本人の意向も聞かねば。
そういったところで、……あれ……？
なんだか、頭の回転数がややゆったりとしている気がし始めていた――。

>>へづつ

◇１１◇　隼人

また京とケンカした。最近、そればかりだった。

「普段は可愛いのによ……。やっぱ根本的になんか違うんだよなーぁ……」

俺はまた、カップ酒のいづみ橋を一口飲む。

今日はちょっと飲み過ぎの気もしたが、酒は強いし、普通に好きだったから飲み続けた。

「雀荘隠んないだけ、いい彼氏じゃんかよーぉ……」

麻雀も特別好きではないが、付き合いを重ねるうちにずば抜けて強くなってしまった俺。

「あ〜あ……、っとと！」

足に来ていた。俺にしては珍しい初夏の夜。人通りの少ない交差点を、あっさり信号無視で渡ろうとしていた。

――パッパー……！

なんか聞こえた気がしたが構わず進む。

「お前！　危ないぞっ」

遠くで、誰かが叫んだ気がした。

――パ、パパー……！

視界が一回転か、最低半回転はした気がする。ブルル……と音を立てて去っていく軽トラ。じわりと、腕や足がヒリヒリしだした。

「お前……、どこ見てんだ！」

誰かに抱えられていた。ダークスーツ、俺よりもやや細身の……女だろうか？

顔を見る。京と違ってマニッシュな、イイ女だと思ったら胸がな

かった。
「聞いてんのか！　人の胸をまさぐるなっ」
拳で軽く頬を殴られた。少し正気に戻る。
カラン――と近くで音がした。仄かなガス灯の下、目を凝らす。
（……拳銃？）
身を翻した男は、すぐにそれを回収した。サッと辺りに巡らす視線、――鍛えられるという印象を受けた。
（暗闇でも見惚れる……鋭利で、真摯な瞳だな）
男は、無言でこちらに戻ってきた。
「他言無用だ」
「あんた、警察なんだな。バカな市民を護ってくれて、ありがとうございます」
酔ってやる気の無い俺は、十字路の道の端の、だだっ広いスペースに胡座をかいたまま頭を下げた。
「……」
反応がないから、頭を戻したついでに夜空をみる。星が瞬いていた。
「綺麗だなぁ……」
俺につられて、男も空を見た。
「――ああ、ほんとだ……」
「――あの」
その声が、あんまり切なく聞こえたせいで、思わず声をかけてしまう。
既に足はあちらを向いていたが、一瞬だけこちらを向いてくれた。
「あんた……恩人の名前が知りたい。――俺は、神原隼人です」
絶対そのまま行ってしまいそうだったが、ちょっとくらいならと思ったのか答えが返ってきた。
「――俺の名は、ギムレット」
「酒の名前だな。クールだなぁ、外人さん」

「……」
もう少し話したかった。手招きをして、隣をポンポンと叩く。
「少し、付き合わないか？　まだまだ酒が余ってるんだ……」
ガサッと、ギムが護ってくれた、ビニール袋を持ち上げた――。
※
沢山のネオン、少しだけスペーシーな高架下。
灰色の瞳、ミステリアスなギムレットに興味を持った俺は、次々と酒を勧めた。取り澄ました様は最初と全然変わらないが、口調はとても静かだった。最初が厳しかっただけで、――恐らく元来は穏やかなのだろう。
ペット・ショップ・ボーイズのファンで、一人っ子らしく気ままな大学生をしていると軽く自己紹介した。俺はよく褒められる巧みなトークで、彼からも簡単なプロフィールを引き出した。
判ったことは、「妹が巻き込まれた極秘事件の謎を追ってきた新米警察官」と言うことだった。その割に、経験からくる冷静さみたいなものを感じた。
「ギムは、なんか不思議な男だな。英才教育なのか、スラスラ喋りやがる。……俺なんて語学のテストやべーのに」
「勉強しろ」
一蹴された。そんな完璧主義な気配と共に、人の許容量を軽くオーバーした理論が見え隠れした。
「なんかさ。あんまりムチャとかすんなよ……って助けてもらって言う事じゃないけど」
「全くだな」
「――でも、気をつけてくれな。俺の勘、あたるんだよ……」
尻が痛くなり、座り直した。その時、硬いものが手に当たったから、手を伸ばしてみたら灰色プラスチックで四角いフレームの眼鏡だった。それは度がない――伊達眼鏡のようだ。
「それは俺のだ……」
ひょいと奪い去り、装着した。

「なんでそんなものを……邪魔じゃない？」
「俺の自由だ」
「似合うけど、素顔もかっこよかったのに」
「お前、男同士でそういうこと言うな！」
また怒鳴られてしまった。――何故だか気が惹かれる、ギムレットに。

◇12◇　ラベンダー

「――オレの名は、ギムレット」
人に助けられたり、人を傷つけてばかりだった俺。初めて人を助けたのは、偶然だった。
すぐに立ち去ろうとしたが、ふと気が緩んでしまい、何故か酒盛りに至った。
（こんなの、久しぶりだ――）
いつ振りだろう。――だがよく考えると、そもそも酒が飲めて、俺に対して気軽な同性の友人なんて、存在した記憶がなかった。
（初めてか……）
次々と酒を勧められた。日本人は皆、こんな風に――ゆるすように、他人を優しく巻き込むのだろうか？
そいつは学生で、ペット・ショップ・ボーイズの熱心なファンで、一人っ子だと言った。
先行して言われたせいで、行きずりの酒盛りとはいえ、真実と嘘を脚色しなくてはならなかった。まあ他人だ、すぐに忘れるだろう。そう考えたオレは、妹も係わって不愉快な思いをした、極秘裏の事件を調査している、なりたての警察官だと自己紹介した。
「ギムは、なんか不思議な男だな。英才教育なのか、スラスラ喋りやがる。……俺なんて語学のテストやべーのに」
「勉強しろ」
少し厳しすぎたのか、黙り込んでしまった。

「――なんかさ。あんまりムチャとかすんなよ……って助けてもらって言う事じゃないけど」
「全くだな」
「――でも、気をつけてくれな。俺の勘、あたるんだよ……」
気をつけろ――そんな言葉、かけてもらった覚えがなかった。
（なにか、いたい……）
ふと横顔を盗み見ると、隼人は何かを熱心に見ていた。
「それはオレのだ……」
「なんでそんなものを……邪魔じゃない？」
「オレの自由だ」
「似合うけど、素顔もかっこよかったのに……」
「お前、男同士でそういうこと言うな！」
「――本当に俺はそう思ったんだから、仕方ないだろ」
ムッとした声で、開き直られた。思わず沈黙してしまう。
「あと、俺の名前はお前じゃないけど……」
更に、澄んだ瞳で睨まれる。目の前の、グダグダとしているが大柄の男に、オレは少しだけ畏れを抱いた。
（――ジョン）
「すまない……ハヤト」
オレはこういった口答えをされた経験がなかったから、素直に謝った。すると隼人は声を殺して笑い出した。
「案外、スムーズに直したな」
「謀ったな」
睨みつける。
「許せよ。――友達なんだから……」
静かに後に続いた言葉。
急に、目の奥と頬が熱くなった。俯くオレは、前髪と眼鏡で表情を隠した。――でも、微笑む口元は隠せなかったかもしれない。
それが、初めてオレから湧き出た感情だった。
※

延々と、なんの実にもならない話をした。
その中には精神論めいたものも含まれていたが、年下のくせに、意外と思慮の深い男だったらしく、静かに聴いていた。隼人は、自分自身型破りだと自覚のある、社会に対するあらゆる批判精神さえも感受してくれたのだ。
多分、「日常的な罪でさえ、しかるべき対処や処罰を受けるべきだし与えるべきだ――公正に」というような事も言った。隼人は、オレにいくつか質問をしたが、全てに確実に答えを返すと、「わかってるなら、否定しない」と微笑って受け入れてくれた――そう感じた。
意見の相違が有ったんだろう箇所は「そうだな」といった風に、とりあえず意見を聴き届けるなり、「そういうこともあるかも知れないな」という反応を返してきた。
そういった全てを重ねて、――オレは少しだけこの出会いに感謝した。
途中からは隼人の音楽談義を聴いていたのが、途中でパタリと途絶えた。横を見ると、案外近くに頭がある。
（――こいつ）
肩に当たりそうだった。寝ている。――のみ過ぎだろうか。
（父親とかって、――こういう感じか？）
オレの半身だけが、温かだった。
そしてオレは静かに、胸元から出したラベンダーのサシェを見つめていた。
※
いい花の香りで目が覚めた。ちょっと寒い。
「あ……、アタマ溶ける……」
重いような、気分がいいような。
ふと肩の重みで横を見やると、ギムまで寝ていた。つまり、二人とも立派な酔っぱらいである。時計は夜中の三時半を示す――夜明けまでまだ時間があった。

（そうだ。久しぶりに日の出でも見よう）
肌寒い中であろうと、もう少し寝ようと考え、ギムの肩を抱く。
（ん？）
なにか握っていた。そっと手から外すと、花のような――匂い袋みたいだった。好きな香りだ。
（なんでこんな可愛いモノを……）
プッと吹き出す。でも起こしちゃ可哀相だと、頬を引き締める。
力を無くした手には返すことができなかった。その代わりにギムの腹の上で、俺が大事に持っておいた。ギムはよく見ると、輝くピアスをしていた。
ものすごく、ゆったりとした時間の流れを感じた。
願わくばもっと早く、こういう男に出逢いたかった。

◇13◇　追憶

「シェリー、似合うよ」
「ありがとう、ギム。――こんなにちゃんとドレスアップしたの、初めて。嬉しいわ」
ミモザの精みたいな黄色いオーガンジーのカクテルドレスの裾を、鮮やかに翻すシェリー。髪も久しぶりに編み上げてやった。アクセサリーまでは手が回らなかったが、十分清楚で美しかった。
「ありがとう、おにいちゃん――」
きっと兄と呼ばれた、鮮やかな記憶になるだろう。――そう、思った。
※
レストラン、ジーズ。オックスフォードの北西部に位置する、ガーデンが美しいブリティッシュ料理の店だ。
今日は立食パーティーだった。
「ちょっとお化粧室に行ってくるわね」
「ああ」

後ろ姿を見送る。
「あらギム。呑んでる～？」
すかさずリズに話し掛けられた。リズは、軍人みたいなオレとでも普通に会話できる、なかなかイイ奴だった。
「いや。今日はあまり、気分じゃないんだ……」
「あらそう。なら、好きなのだけ食べときなさいな！」
マイペースな彼女の言葉に、思わず笑みが漏れる。
「……そうするよ」
彼氏が着いたらしく、それだけ言って人混みに消えていった。俺の視線はトイレの在る外の方をさまよう。――その時、遠くからジョンが俺を見ているのに気づいた。
※
十五分立ってもシェリーが戻らない。どうしたことかと、シェリーの事が気になった。
外に出た。トイレ付近の娘に確認させたが、シェリーはいなかった。胸騒ぎがした。
「ギム？　どうしたんだ、青い顔して」
「セシル、他にトイレはあるか？」
「腹を壊したのか？　トイレはここだけなんだよ……」
眉を寄せるセシル。
「シェリーがいない。お前も探してくれ」
「シェリー？　さっき俺にドレス見せてくれたよ。ギムが買ってくれた！　ってね」
セシルの笑顔は眩しすぎた。それどころじゃない。
「微笑ましくしてる場合じゃないんだ！　早く……早く見つけてくれっ」
頭までガンガンしてくる。酷い胸騒ぎ。
「あ……わかった。俺は反対側探してくる！」
「ああ」
オレ外を出た。通りがかりのカップルに黄色いドレスの少女を見

なかったか尋ねると、あっちで大柄な男と話していたと教えられた。
指さされた方へ、礼もせずに一目散に走る。
上品な婦人に出会った。また尋ねると、物騒な様子だったと囁かれて最後まで聞かずに走り出す。
（――あんなに危険性を露わにしていたのに！）
後悔からか、目から涙が吹き出していた。
（シェリー――！）
子供がいた。構わず聞いた。なにか焦げ臭い。
「黄色いドレスの、ゴホッ……女を……見なかったか？」
「みたよ。あそこに行った」
それは最近珍しくなった、古びたレストハウス――もしくは廃墟と化した店だった。不思議なことに、なにかもやもやと煙が見えた気がした。近づくオレ。
（まさかそんなこと）
嘘だと思いたかった。しかし視界の端に、どす黒い煙が細くたなびくさまが映る。後ろに子供の母親の声を聞いた気がしたが、助けを求める前に、オレは閉ざされていなかった戸の間から、建物に侵入した。
ひどい煙の中、どこかでガラスの割れる音がした。ヘビースモーカーだったジョンの姿が頭をよぎる。
折り重なった塊を見つけた。まるで、シェリーがジョンを背負ったまま倒れこんだような。
（見つけた！）
シェリーをジョンの下から救い出す。良い顔色だ、よかった――と思ったのが、最後の記憶だ。
※
（何故オレも、殺してくれなかったんだ？）
ジョンは鈍器による軽傷を負った死体の姿で回収された。
シェリーを抱いたオレは、セシルによって救出されたらしい。
シェリーは事切れていた。一酸化炭素中毒死だった。

形式的な司法解剖の結果、シェリーは乱暴はされていなかった事が証明された。それでもオレの気が納まる筈もなかった。この辺りでは遺族は火葬に立ち会うことができなかったから、尚更オレの神経を逆撫でした。
遺灰で戻ってきたシェリー。
オレはフェローに金を握らせて、学内のクラレンドン・ラボラトリーで、それを合成ダイアモンドにした。
いつでも身に着けていられるように――。
（……ゆるさない。生きてるお前を、オレは絶対に赦さない……）

◇14◇　友愛

ゴツンとイイ音がした。膝上に抱きかかえていた幼い妹の頭を、うっかり窓ガラスに軽くぶつけてしまった。
（ごめん！　泣かないでくれっ）
何も言わないが、眉がきゅっと寄ってしまっている。
（プリンセス、ごめん――）
目が訴えていたのか、もう少しのところで堪えてくれたようだった。ホッとして、抱きしめる。代わりに、お気に入りを歌ってやる。それはニューヨークカフェでの出来事だった。
※
目を覚ますと、クラシカルな天井が目に入った。
（そうだよね、今は日本に居るんだ――）
もう少ししたら、瑠璃に逢える。6つも年が離れていると、ちょっとパパの気分だ。
（最近はどうしているだろうか？）
マリーンにいたころと同じスピードで身支度をすませ、同フロアの皆と合流する為部屋を出て、廊下を行く。――琥珀だ。
「おはよう」
「おう。ここの絨毯、音の吸収ヤバいのによく気づいたな！」

「琥珀なら、長年の匂いで気づくよ」
たとえ死角な真後ろであろうと、それは例外ではない。
羨ましがらせるのは可哀相だと思い、夢の話はしなかった。ボクより少し大きく成長した琥珀は、今二十一。そろそろ妹離れさせる時期だった。
まだセシルの起床時刻ではなかったから、琥珀を誘ってホテルのロビーへ向かう。キングスチェアにどっかり座った琥珀に、昨日の報告をする。
「やはりギムレットは、神戸ではなく横浜に来ている」
「ミスターローズの、嘘の情報を信じなかったんだな」
「どこまでも、セシルを追う気なんだ」
「恩人を犯ろうとするなんて、どこまでもぶっ壊れてるよなぁー」
心の底から訳が分からない――といった風なジェスチャーをする琥珀。
「そうかな……。生き甲斐が見つからないのかもよ？」
「肩持つじゃん。まあ、来てくれた方がこっちは助かるけどな」
瑠璃の仇の事だ。アサシン、ギムレットは他人を巻き込まない事を信条としているらしく、気配はするのに滅多に目の前には現れなかった。ボク達は接近戦を得意としていたし、今日の街中でライフルマンになる訳にもいかず、それなりに気をもんでいた。
「でも――、彼だって、妹を亡くしているんだ……」
瑠璃の事を差し引くと、ボク自身はギムレットの痛みがわかり過ぎるほど解ってしまって、それも最近の悩みの種ではあった。
（目の前で妹が死んでいったら、ボクだったら耐えられない……。二人きりの兄妹なら、尚更だ！）
「……」
この話題になると、意見の相違が出てくるから仕方のないことだった。
※
「こちらが俺の愛息、セシルだ」

「はじめまして。どうぞ宜しく……」
友人を一度に二人も無くしたのだから、気落ちするのは仕方のないことだった。
「はじめまして、ボクは珠璃です。こちらの黒豹みたいなのが弟の琥珀です。これからお願いします、マスター」
ある晴れた日の朝、ボク達はその日からセシルの護衛についた。まだ、髪は短かった。
「俺はちょっと急なアポで出なくちゃならない。宜しく頼んだぞ、クラウンズ」
「イエス、サー！」
笑顔のミスターに、揃って返事を返す。ゆっくり、ここは戦場じゃない――。ボク達は、わざわざ名誉除隊してここまで来ていた。目の前のセシル・ローズ――彼は暗殺されれば、盛大なスキャンダルになること間違いなしの超重要人物だった。
ただの学生ならまた違ったかもしれないが、彼の祖母ドロシーは、大富豪の上にローズ奨学制度をつくった人物だ。各国がその動向を窺っていた。セシルが亡くなれば、オックスフォードは優秀な学生を一人失うだけではなく、犯罪者を出すという不祥事にさいなまれるだろう。
「セシル、オレ達はマリーン・コーアから来た。珠璃なんてもうサージャントだったのに……」
「琥珀、余計なことはいいから」
セシルへの笑顔のまま、琥珀を叱る。
「セシル。先に二、三確認しておきたい事があるんだ」
「ああ、なんでも聞いてくれ」
やっと少し、笑みを返してくれた。
「キミもある程度武道の嗜みがあるんだよね？　ミスターから伺ったんだけど」
アハハと笑いだすセシル。
「パパは親バカなんだ！　でも、自分を守れるのは本当だよ。俺も

フェンシングは強いんだ」
資料で見た。ギムレットはフェンシングの名手だった。
しかし、本気で来る場合、何をしてくるかはまだ読めなかった。
もう少し質問を続けた――。
その時、コンコンとノックの音が聞こえた。
「どうぞ」
セシルが言う。開くドア、現れたのは、
「こんにちは、はじめましてっ。二人の妹の瑠璃です」
「瑠璃、待ってろって言っただろー」
琥珀がそれなりの事を言った。バカンスの為、瑠璃もアメリカの実家から一緒に来ていた。
「うわカッコイイ！　セシルさん、でかけましょー？」
滅多にないくらいに明るすぎるノリだった。知人のミスターから話を引き受けたのは瑠璃だったから、きっと心を砕いているのだ。
「――そうだね。ありがとう」
それを察したんだろう。セシルは、すぐに瑠璃のバッグに手を伸ばした。

※

瑠璃も昔から訓練された武道派だから、少し油断していたかもしれない。
セシルと瑠璃、オレ達は後ろから着いて行った。
オックスフォードをいろいろ案内してもらった。アリスのところでは、瑠璃はとっても楽しそうだった。

この一年ばかり、マリーンでの珠璃の様子がおかしかった。元々オレとは違ってデリケートなタイプだから、幾ら腕が立っても、志が同じでも、マリーンとの‘ズレ’が出始めていたのかもしれない。
その頃、瑠璃からオックスフォードの学生のボディガードの仕事の依頼が来た。‘できれば’との事だったが、すぐに除隊の希望を出し、三か月と経たずにここへ来た。

その間依頼主はどうしていたのか気にもなったが、恐らく暗殺者の方がまだ立ち直っていなかったらしく、逢うこともなかったという――。
ちょっと離れて様子を窺っていたが、周りに人もいるし平和な学内だった。
それは唐突に起こった。オレ達は暗殺者が‘学内の人間’だという事を、キレイに忘れていたのだ。
「セシルさん！」
瑠璃は落ちた。セシルを庇って。
ギムレットはどこからともなく現れて、セシルを突き落とそうとした。しかし、反射神経の良い連れによって目的は断たれた。
「瑠璃！」
叫んだ珠璃の声が、耳から離れない。
※
「彼の性格を考えると、毒殺とかはないと思う。あと、他人もできるだけ巻き込まないように配慮してくるはずだ。でも万が一の事がある――だから、俺は護らなくいい。代わりにこの先事件が起こる時、俺に巻き込まれる不幸な‘他人’を護ってほしい――」
あの言葉が蘇る。――確かに、ギムレットの狙いは最初から最後までセシルだったんだろう。でも、現実に瑠璃が瀕死の状態であった時、その言葉は願いになりつつあった。
琥珀は姿を消した。おそらく何もできない苛立ちからだろう。そのうち帰ってくる。
考えたくもないけれど、瑠璃が即死だったらボクは狂っていたかもしれない――。
でも不幸中の幸い、一命は取り留めた。……少しセシルと話そうと思った。
「葬儀からこっち、ギムに眼力で何度殺されそうになったか……」
セシルも少し、神経をやられていそうだった。
「現実に、狙われていたことが判明したね……。ねえ、事件につい

て教えてくれないか？」
「噂は真実じゃない。……ジョンは思い余ったんじゃなく、シェリーへのけん制目的でレイプしようとしたんだ。
あいだに俺を挟んだ三角形だよ。――しかも、病室のギムレットに言われて初めて気がつくなんて、本物の馬鹿だよ、俺……。――シェリーは引っ掻く等の抵抗と、鈍器の一撃で身を守った。その後に火災が発生したけど、優しいシェリーはジョンを助けるために、その場に立ち往生してしまった。――だから、逃げ遅れたんだ……ジョンの煙草が原因だった」
はらはらと涙が頬を伝っている。本人は気がつかないようだった。
「ジョンは、有るはずだった兄の愛情が受けられなかったことを常に残念がっていた――それも、俺やシェリーに何かを感じた原因だったのかもしれない……」
「すべて、神のみぞ知る――なのか……」

◇15◇　京まで早起きして
はやとと隼人
隼人がサシェなんて持ってる！
「これだから男って……！」
「これはー！　一晩飲み明かした男の持ちモンだよっ」
「……ふ～ん？」
朝帰りの男の台詞、鵜呑みになんてしてやんない。
（バッカ！）
どうせ、惚れた方が立場弱いってセオリーはいつの時代も変わらないのだと思う。
最近、岬が家出してくれたお陰で、なんとなく一番の危険人物（間違いがあるならこの女しかいない）がいなくなってホッとしてたっていうのに……。
娘の家出で、いきなり大人しくなった岬パパの様子を伺いに行く。
なんてったって、うちのケーキ屋と岬の理容室は三軒隣なのだ。―

―外に出れば視界に入る。
なんと！　岬が帰ってきてた。ガラスのドア越しに中を窺う私。あんまり近づきすぎて、ガラスに私の自慢の睫毛を押しつけてるみたい。でも、かまわない。
「――お騒がせで、ごめんね。でも私、セシルに着いてって世界を見てみます。そして本を書くの！」
「そうか。顔を見せてくれただけでも……、好きにしなさい。パパはずっと店やってるから」
「では、うちのワトソン社を通して、常に連絡は取れるように手配しておきますので」
　よくわっかんないけど、岬はまたどこか行ってくれるみたいで助かった。
（よかった♪）
　そう思ったのも一瞬だった。
「なにーっ、俺もついてくぞ！」
　私の背中に張りついて一緒に聞き耳をたててたみたい。
「なんで！　人のハネムーンに隼人がついてくのよっ」
「俺はあいつの‘まともな’父親代わりだかんな」
　昔からこう。ひとりっ子の隼人は、兄貴のいる私になんて目もくれずに、同じくひとりっ子の岬の世話ばかり焼くのだから、耐えらんない。
「～～～ばか！」
　結局、言い出したら聞かない隼人は、一週間くらい岬について行って安全を見届けてくるのを強行する事に決定・私に報告したのだった。
「……ふざけんな、馬鹿隼人！」
　もうすでに泣きそうな私。でも止めても無駄なのは経験上解り切ってるから、反対に約束をさせた。
「今日一日、私に付き合うこと！　……絶対、一週間で帰ってくんのよっ」

※

岬達も明日出発するらしく、隼人はちゃんと私の言う事を聞いた。行きたい場所があった。隼人に車を出させて、首都高速大黒パーキングまでドライブ。

「なーんで浜っ子なのに、わざわざベイブリッジだよ？」

「こっち！　スカイウォークってのがあるんだって」

よく晴れていた。さっきまでの鬱なキブンもちょっとどこかへ行っていた。

「いい景色〜」

建築中のランドマークタワー、やっと半分くらいだろうか？　潮の香りだ――。

「てか、承諾してくれてありがとうな」

傍にきた隼人をちょっと睨みつける。

「……渋々よ。ホントは、少しだって離れたくなんかないのに！」

ちょっと切なくなってくる。

「あいつ、……岬はほんとに面白すぎて、ほっておけないだけなんだ。ペトショも詳しいしな……」

「いーな―、岬」

はやく、隼人の隣にいられるように、お嫁さんになりたかった。

「なあ、京。俺ちゃんと、お前の事考えてるよ」

「何を、どう具体的に？」

思わず畳み掛けてしまう。……少しだけイライラしていた。

「――大学卒業して就職したら、プロポーズする」

意外すぎて、ビクッと後ずさりしてしまった。

※

行きたい場所はもう二つあった。でも、その場所はさっきより全然近い。

最近、フェリスの生徒で囁かれている噂。普段なら噂なんて完全無視の私だけど、急に気が変わった。

――‘愛か奇跡か平和’を祈るときは、それ相応の場所がある――

所謂、横浜の三塔を一望できるスポットだ。
神奈川県庁、横浜税関、横浜市開港記念会館……これらを一望できるスポットは、二ヶ所判明しているが、一ヶ所は自力で見つけなければいけないのだった。
最近の私はこればかりずっと考えていた。勿論、隼人の愛を得る為。
でも今朝は違った。隼人の身の安全を願っていた――。
「お、確かに見えるな」
「でしょう？　赤レンガでも、こっちの先端まで来た事なかったわよねー」
そして最後は、日本大通り――三塔に一番近い場所だった。
「おー、視界ギリギリだな。でも、ここが良いな」
「確かに。……うんでも、良い景色♪」
そう、この二ヶ所は有名だった。ベイブリッジという見晴らしのいい場所が、私の出した答えだった。
（神様ありがと……）
脳裏に焼き付けておこう。いつかまた喧嘩しても、許せるように。
「腹減ったー」
「うん、だねー」
朝から忙しく動き回っていた。
「今日は、ふりむけば……って気分じゃねーな」
「角曲がったとこに、ペリーって喫茶店あるよ。パンが美味しいって」
「じゃソコにする！」

◇16◇　アン・ガルド

夜明け前に起こされ、横浜美術館まで歩いた。そこで見た朝焼けも、なかなか良かった。
家に帰る前に送ると言われたが、特にベースを設けてなかったか

ら駅まで送ってもらった。有名な観光スポットであるキーカフェミュージアムより、本社を探るつもりだったからだ。
　セシルがＣＭ撮影の為日本に渡った、これはオックスフォードでは有名な噂だったが、土産を頼んだ者でさえセシルが正確にどこに行ったのか把握していなかった。
ラッキーな事に、セシルの番犬を見つけた。――隼人のお陰だ。
どうやら、セシル達は今夜、ニューグランドに泊まるようだった。
今日は妙に攻撃的な気分のオレは、夜を待ってセシルをおびき出した。
――‘アン・ガルド’　拳を握って待つ――
どう捉えてくれようと、構わなかった。
※
部屋のドアに手紙を見つけた、岬も一緒にいる時に。
本当は連れて行きたくなかったが、ついて行くと言ってきかない。
でも俺は、‘拳を握って待つ’に少しだけ望みを抱いていた。一対一の勝負だろうか――と。
夜中、指示通りに単独で――岬もいるが――、赤レンガ倉庫の隣の旧税関事務所前に立った。
「うーん、薄気味悪い……」
岬が言う。
（来るなら、どちらからだろう？）
――パン！
軽く、銃声が響いた。倉庫の二階バルコニーにギムはいた。
「ゲット・ダウン！　見ないで走れっ！」
珠璃の声だった。
威嚇なのか？　ギムならば、この距離ならば、一発命中もおかしくなかったのに。もう一発、二発。
視界の端で、琥珀が応戦していた。
ある程度倉庫から距離を取ったところで、後ろを振り返ってみた。
ギムレットと思われる影はひらりと着地すると、海の方へと消えて

行った。
「死ぬかと思った……、セシル？」
「迷いがあるから、してこないんだ。決定的には、徹底的には――」
喉の奥が、潮辛かった――。
※
「なんだよ……あれ……」
銃撃戦？　まさか――。
日本の、――しかもこんなに身近な場所で、こんな映画の中みたいなことが起こるなんて思わなかった。
岬の保護者代わりなんて思っている俺だけど、この状況に、ひたすら困惑していた。
「それにあいつ――」

◇17◇　ゴースト

薔薇色の宝石のペンダントを拾った。
旧税関事務所のレンガの淵。白い雲の垂れこめた朝を、ぼんやりと歩いていた。昔のプラットホームのようなものがあって、そこの階段を上り、ベンチに座った。頭を抱える……鈍く重く、なにかぼんやりとしていた。
紅い色に魅了された心地のオレ。……日本に来てからろくに寝ていなかった。
「……ギムレット……」
「シェリー？」
「……私を覚えてる……」
「当然だ――」
「……私、忘れないで貰えて嬉しい……」
こんな幸運、ありえる筈がない――。

そう考えながらも、オレは脳裏に響く妹の声に応える。
「……セシルか？」
こんな大きな宝石、滅多な持ち主ではないのはすぐにわかることだった。
（――どうしてこんな簡単な事）
それにシェリーの言動もおかしい。
優しいシェリーならば、すぐに“復讐なんてやめて”と言うはずだった。これはなんだろう、オレの心を仄めかすのか、夢か――。
「……ジョンは構わず逃げろって言った――。でも、私は、――優しさじゃなく人道的に――見捨てるなんてしたくなかったし出来なかった……」
「なくしてしまったよ、ごめん」
「……すまない――。ジョンの心からの懺悔で、……私は赦そうとおもえたのよ……」
「シェリーに貰ったサシェ、確かに昨日、この手にあったのに――」
今の君は覚えてるだろうか？
コッツウォルズのスノーズヒル、あのラベンダー畑を。あの時が、オックスフォードに来たばかりの頃が、一番自由を幸福に感じたよな――。
隼人の言葉を借りれば、これは最期まで、とどかぬ想い？
君は、生ることが出来たのか？　哀しみの天使――。

◇１８◇　アサシン

岬の番犬としての、素晴らしい主張で、同行を認めてもらった俺。
そして数時間前、少し怖気づいた俺。
しかーし。岬のハッピーハネムーンの為！

何故ボディーガード付きなのか質問しまくった結果。とりあえず、セシルが果てしなく仇とみなされて、やや危ない身分である事（俺が銃撃をみていたのは話していないけど）、そして俺の中では、ギムが嘘を吐いていたことが分かった。
あとクラウンズの二人も。珠璃は大和撫子になれそうなくらいに優しいし、琥珀はかなり気が合いそうだった。
なにかあったらこいつらに、俺一人分負担になるかもしれない――という気がぶっちゃけしないでもなかったが、それは岬を見守る事には代えられなかった。
セシルの護衛についてからのクラウンズは、どうやら交代で休暇をとってアメリカの家族に会いに行っているようだった。次は珠璃の番で、アメリカ経由でまたセシルと合流するそうな。
「無いの～！　命のペンダント！」
朝、ニューグランドにもう一度行ってみると、岬が喚いてセシルを困らせていた。
「また、プレゼントするよ？」
今にも探しに行きそうな岬。セシルは、岬を外に出すのも控えたいようだった。顔色がよくない。
「ばっか！　あれでいいの……あれがいいのよー」
真実、大切なのだろう。――昔からよく、モノを無くす岬。
（あーもう！　でも危ねぇし！）
「俺が、探してきてやるから、泣かないで待ってろ！　な！」
「あんたって、凄い――。……ほんとお願いします……」
まったく。泣きたいんだか、驚いているんだか、――はっきりしろよといいたくなる顔だった。
※
赤レンガまで、来た。憂鬱な曇り空。
岬達が走った辺りにそれはなく、俺は旧税関事務所の周りをぐるりと迂回する。
あれを、知っている――。

旧横浜港駅プラットホーム、頼りなくベンチに座っていた。
「ギムレット」
ゆっくりと顔を上げるギム。何故か濡れている。――小雨まで降ってきた。
「俺も座るぞ」
少し間を取って、隣に座る。雨の香りで思い出した。
「そうだ……、これ返す」
「……お前が持っていたのか……」
絞り出したような声、少しだけ見開かれた瞳――今日は眼鏡をしていなかった。
※
（シェリー、ごめん――）
少しでも妹の声が聴けるのはいい。
しかしオレはどんどん気分が悪くなっていった。――セシルのペンダントを手放すことにした。
「ギムレット」
その声に、顔を上げる。
いつのまにか小雨が降り始めていて、視界も曖昧だった。
「俺も座るぞ」
隣に座った途端に、隼人はハッとした顔つきになる。
「そうだ……、これ返す」
「……お前が持っていたのか……」
帰って来た、シェリー。
「ギム、妹の仇を追ってきたんだな」
驚いた。そんな所まで知っているのか。
隼人の顔は、責めるでもなく笑うでもなく、曖昧に――静かだった。
雨が静かに潤いを重ねている。肌寒い。
意識がはっきりしている内に、誰かに話してしまいたくなった。
「――シェリーは生きることに肯定的だった。……言い換えると、

家族の中で唯一、人並に自己肯定感があったんだ……」
「……」
いきなり饒舌になったオレに、今度こそ感情を……とまどいを露わにする隼人。
「自分自身を無条件で愛すること。……それがもともと難しかったオレが、シェリーという鏡を亡くして――どうして生きていける？」
「――どういうことだ？」
（……聴いてくれるのか――）
※
「――どういうことだ？」
もう目の前の男が、一体何者か分からなくなってきていた。
未知のタイプだった。こんなに複雑な人間、知らなかった。
「オックスフォードで出会ったふたり。……エクセレント過ぎたんだ――。仕事を極めても、子供を授かっても、自滅主義？　……人生ここまでという絶望感。知人にもならないような、遠い親戚に子供を託して、しんだ」
「……」
もう、なにも言えなかった。
「言い訳なんかじゃない……。オレは先天的に、――精神が弱い！」
もっと――、いや数日でも早く出逢えたら、俺はこいつの味方になってやれたかもしれない。そう思った。
※
てっきりすぐに高飛びするもんだと思っていたが、俺は持っていたけど、岬は持っていなかったらしい。
パスポートの都合で、結局数日国内に留まっていた。
その間に京とのタイムリミットになり、且つ安全性も感じとった……自己満足した俺は、泣く泣く別れを告げる――空港で。
「岬が選んだから、危なくてもとめねーよ」
「……うん」
「逢えそうだったら、逢いに来いよ！」

「……うん。逢えそうだったらね！　絶対！」

※

なんだかもう、生きる目的がそれしかないんだ。
……運が良ければ、神に見放されていなければ、なにか見つかるだろうか……。いや、
ここからまたオレは、アサシンだ。
俺は、ギムをとめられるだけの真実を何も持ってないんだ。……なにか見つかることを、祈ってる。

◇19◇　ローズガーデン

「水辺が好きなのよー」
灯台下暗しで、ロンドンに来ていた。
今日ようやく、アメリカから珠璃が到着した。セシルと琥珀と四人で、リージェンツ・パーク内のクィーン・マリーに来ていた。
これからは、私とセシル、身の振り方を考えながら各地を回る予定だった。できれば定住したいから、候補地を探しながら――。
珠璃とふたり、湖を見にきていた。
セシルと琥珀は、野外劇場の‘ボーイフレンド’のチケットを買いに行っていた。
「岬は……セシルの事も好きなんだよね？」
久しぶりの珠璃が、話をすっ飛ばした。でも、労る様な物腰は健在だった。
「……やっぱりそうかしら？」
「いいじゃないか。恋愛は自由だ」
意外なコメントだった。ありふれたキーワードだけど、なにか特別な響きを持っているような気がした。

「珠璃は、恋人は？」
「今はいないよ。好きな人も特に……って感じかな？」
「えーもったいない。優しくて、かっこいいのにー」
「ありがとう。今は、岬ってプリンセスと、二人の弟君のお世話をしなくちゃ。とっても充実してるよ？」
「あはは。……んでも、なんか考えてるでしょ？　――いつも」
驚くほどサッと顔色が変わった。
家族との再会でリラックスして、ポーカーフェイスを忘れてしまったんだろうか？
「珠璃？　どうしたの？」
「岬、ボクは迷っているんだ……」
「なにを……」
「皆、どうして、会話をするだけの勇気が持てないかな……って。話せるのは人間だけなんだ。だから喜怒哀楽、それ以外にもいろんな感情のバリエーションがでてくる。それを壊すのも、整理するのも人。生かすのも、人なんだよ」
「――そう、よね……」
畳み掛けるように言われて、少し驚いた。
「あ、ごめん――最近ホント、岬の言うとおり結構行き詰っちゃってさ。多分マリーン抜けてから、気が緩んでるんだと思うけど……。ちょっと、いさかいとか……ゴゾーロップ？　に、響くんだよね」
「そんなの、珠璃の優しさだわ。そのまま大事に、すればいいのよ……」
ちょっと投げ遣りな顔をする珠璃に、そんなことはないって言いたかった。サンクス――と静かに囁かれた。
続いて言われた言葉に、戸惑う。
「あと、――どうしてもギムレットに深く感情移入してしまうボクがいるのも、事実なんだ――」
※
しばらく話したあと、野外劇場に戻る。――雨音が少し強まってい

た。
日本とは違い、多少虫食いがあっても咲き乱れるバラはとても荘厳だ。特に、今日のような曇り空の日には。
ミュージカルは毎日雨天決行の筈なのに、人がいなかった。
「えー？　どうしちゃったのかしら……」
「おかしいな……二人はどこだ？　とりあえず――」
珠璃が次に何をいうのか気にしていた私に、圧迫感が襲った。
※
「こりゃ岬が残念がるなー」
「そうだね」
しばらく待ってもチケットが発売される様子がない。通りすがりの婦人に聞いてみたところ、‘今年から安全性に配慮して、野外ミュージカルは雨天中止’になったと判明した。そのうち戻ってくるだろう岬達の為に、とりあえず傘を買って戻ってきたところだった。
「……！　岬！」
急に傘を捨て、走った琥珀。何が起きたか分からない。
傘の下から見た光景――珠璃と岬の後ろから、ギムが襲いかかったところだった。
「みさき！」
ギムは岬をホールドし、銃口を俺に向ける。
――ドン！
この国の銃声は重いなぁ――そう思いながら死を感受するのは、俺だったのに！
「シュリ！」
まず俺が叫んだ。次に岬。
「珠璃ぃ！」
ギムは琥珀の一撃を受けた後、すぐに逃走したようだった。
「なんで……珠璃！」
琥珀は、自分と交差した銃声で、一拍遅れて振り返った。すぐに珠璃に駆け寄る。もう、ギムには目もくれないようだった。

「どうして！」
俺は……叫んだ後何をしたのか――。
※
「シュリ！」
「珠璃ぃ！」
ギムだった。追ってきていた。
「なんで……珠璃！」
琥珀の悲痛な声。私が圧迫から解放された瞬間見たのは、セシルに弾が当たるのをギリギリで護った珠璃の背中だった。
「どうして！」
セシルは瞬間的に、自殺したくなったようだった。
無我夢中でとめた。
しばらくして、琥珀の方を見た。
たくさんのローズの上に倒れたらしい珠璃、まるで幻想的だった。
あの場にいた三人、何を思ったのか――。
涙が溢れて止まらなかった。

◇２０◇　エアメール

パパへ。

日本を離れて半年も経ってしまいました。ずっと電話も手紙もできなくてごめんなさい！　いろいろあったの。
二週間前に結婚しました。相手はセシルです。
とりあえず、文句はありませんよね？

結局、パリもスペインも却下してイギリスに向かいました。最近は、海辺の街の路地裏にカフェを開きました。
元々ウエイトレスだったからね。結構上々だよ！

たまに納豆とおソバがものすごーく恋しくなります。でもこっちの食材も、いろいろとっても美味しいから、大丈夫です。

さいごにひとつ、赤ちゃんもできました。三ヶ月目。
パパはおじいちゃんになるんです。

それまでは、日々をエッセイにしたり、沢山たくさん物語をストックしておこうと思います。
だって小説は私の子供だから、書いてあげないとイキイキできなくてかわいそうだもん。

まあ、そんなかんじです。
そっちも寒いのかな？　隼人と京は元気？
風邪ひかないよーにね！

じゃあ、またね☆　　Ｍｉｓａｋｉ

＊ＰＳ＊
あの頃の情熱を私自身に思い出させてくれる。
そんな作品を今の、色々経験した此処にいる瞬間の、私で書きたい！
そう思ってます。

つづく＞＞＞

FINAL

A different point of view

■■B3arts■■

スタッフの皆へ　　B3arts代表　京飛鳥

横浜美術館に程近い場所、ニュークラシックな佇まいが当時話題になったB．B．hotel。この場所を拠点にし、クリエイター及びスクール講師陣などの作品を中心に、美術・演劇・建築・まちづくりなどに貢献していく。（リーフレットから引用）
これが、プロトタイプではなくなった私達の目指すものです。
これからは、開国博Y150タイアップイベント‘Baybridge ART 2009’に向けてのヘルプがメインです。そして、天井までの空間を活かした、高さや立体感のある個展も、同時に企画していきましょう。
私なんかを選んで頂きまして、ホントに有難うございます。これからもアイデアのある限り……パッション果てるまで！　尽力していきたいと考えていますので、どうぞ宜しくお願いします。

☆

ありふれた私で構わない
今はまだ踏み切る事が出来ないけれど

いつか思いがけず早く別れるかもしれない
でもなりたいと願うのは、紙に枠にとらわれない
この関係性

ＢＬＵＥ――ベイブリッジの塔の先端は、毎晩白く、また、青く染まる。
何故かあの日と同じように来てしまった。無人の、プラットホーム。
このベンチには、座りたくないのに――。
「お前には、……分からないよ」
（説明してくれなきゃ、分からない――！）
「知りたいわ、教えて――？」
ジェンダー、だから？

――ントトン……トントントトン……
ねえ知ってる？
貴方が好きなＰＳＢの、ｏｎｅ　ａｎｄ　ｏｎｅ　ｍａｋｅ　ｆｉｖｅを始めとする、……ゴシップ物をテーマにする音楽って、必ず心臓の音みたいなビート音が、底辺に流れているのよ。
懐かしい、――ライバルの香りがする。

☆

あの京、……母さんが、このまま寝てるわけがない――。
これがオレの、フィーリングだった。ったって、馬鹿にならない。
オレは昔から、これで色んな危機を脱してきたからだ。
母さんの手がよく動く……って葉夜が教えてくれたから、見舞い

に来ていた。
　みなと病院に転院してきてからは、結構近いから、結構通っていた。自然、葉夜とはダチになる。
　葉夜と言えば、お綺麗な彼方に誘われてモデルの卵になったせいか、最近結構イイ感じにモデルっぽくなってきていた――。
　コンコン
　ノックの音がしたから、ドアに近い葉夜が開けてやった。
「こんにちは」
マリーンルージュ――あの船の名に例えたくなる様な、クールで、ほのかに甘いマリンを香らせて現れた。
知らない女だ。高校生位に見えるから、二つ三つ上だろうか？
「どなたですか？」
　葉夜は家族じゃないから、オレが聞いた。
「はじめまして。えっと私、隼人と京さんの、幼馴染の娘の咲です」
「……へえ。あんたが咲か……」
「アキト知ってる人？」
　葉夜に聞かれた。
「ああ。――あんた、一人で来たのか？　確か……イギリス住まいだっただろ？」
「ええそう。多分、すぐに隼人も来るわ。今、ランチタイム狙って、琥珀が迎えに行ってるから……」
（琥珀……？）
「それより、京さんっ……」
　咲は何も言わずに、母さんの枕元に立った。
「初めてお会いするのが、こんな形で――」
　嗚咽が聞こえるのは気のせいか？　葉夜も目を丸くしている。
長くひとつに編んだ髪が、母さんの頬に垂れていた。大きな瞳から、ポロポロ涙を零している――あの時の葉夜レベルに。
（やさしー奴……）
「あ……見て、アキト」

「……ああホントだ……」
母さんの手が動いていた。その時。
ガラッ
「咲ー！　隼人連れて来たぞー！」
思わず俺と葉夜はそちらに注目した。また知らない奴だったからだ。――でかくて、眼つきが鋭い。
そしたら今度は隼人が居て、ホッとしたのもつかの間、――親父は何故か目を見張っていて、その目線はベッドの方だ。
（どした？）
ベッドに振り返る。ああ、そうか――。
「京――」

☆

母さんは明日退院することになった。いや、もう今日か。
例の如く、朝日を見るのが好きな隼人に、ゴーインに夜明け前に叩き起こされた。
「マジざっけんな、馬鹿隼人……」
オレは成長期。今スグ、夢の世界に戻りたい。
「まーそう言うなって。京が復活したら、あんまり二人きりで話せないだろ？」
「んだよ、その言い方……」
「他意はない、まんまだ」
横浜美術館。母さんが色んな面を持っているのを、父さんは気づこうともしない――。
母さんは自殺を謀ったんじゃなく、大事な書類とともにダイブしてしまったのだった。……恐らく、趣味が高じて責任者になったB3美術スタッフとのトラブルや、本業――敏腕編集者なのだ――の疲労も溜まっていたのだろう。
それなのに、父さんは――。

「俺な……京に、離婚を迫ったんだ……」
「はァ？　初耳だぜ。――理由は？」
「わかんね」
「……隼人がそう言うのは、本当に分かんないん……だよな……」
朝から物凄く疲れてしまう。
「――でも。……それでも許せるのは、確かにふたりに愛してもらった記憶があるからだ……」
今度は隼人が、オレを見る番だった。
「オレは隼人によく似てる方だと思うけど、オレと隼人はやっぱり違う生きモンなんだぜ……。だからもう、あんまりオレの事を過剰に気にすることなんて――ないんだ」

☆

京さんは、明日退院することになった。
目覚めた時は、隼人さんと空人以外は「誰？」という顔をしていたけど、隼人さんが私と彼方をきちんと紹介してくれたから、仲良くなる事が出来た。
偶になんとなく、夢現レベルまで浮上していたようだ。京さんは、「女の子の気配はしてた……」と、私にとって嬉しい言葉をくれた。
聞いてみたい事が、あった――。
「葉夜はなんで、ずっと……私に逢いに来てくれていたの……？」
「知りたいことが、あったから……」
「――なあに？　何でも聞いてちょうだい」
不思議そうに、ふふふ――と笑う京さんは、本当に女優さんみたいで、近づくのも勿体ない感じだった。
「‘リアル・ベイブリッジ’――」
京さんが驚いた顔をする。――当然かもしれない。
「なんで――……あ……」
私はこくりと頷いた。

「あの資料の、一枚目の名前でわかったんです」
「そーか。――アレを知ってる子、まだいるんだ……」
京さんが、泣きだしてしまった。

☆

雨。
雨で思い出すのは、隼人との事――。
事故前最後のデートの日は平日で、偶にはがら空きの赤レンガ倉庫にでも行こうと思った。
でも急に自分の担当作家が‘工作船’の資料を欲しがっていたのを思い出した私は、隼人と一緒なのにもかかわらず、先に海上保安資料館に行くことに決めたのだった。
つつがなく資料と写真を揃え終わり、ホッとする。二人でランチの為に、赤レンガまでと、移動した。
でも、ほんの少しの所で、かなり大粒の雨。ぽつんとある、旧横浜港駅で雨宿りしようと、隼人を誘った。
そこで、何故か……隼人はぽつりぽつり、ここでの昔の、冗談ともつかない思い出話をしたんだわ。
「昔のダチに、古風な奴がいてさ。――仇討ちを仕事にしてるんだぜ……それがまた、スペシャリストな上にゼネラリストで――」
「え……ほんとう？」
あの時私、笑ってたけど、本当は聞きたくなんかなかったのに……。
そして、離婚の申し込みをされて、ちょっとだけ口論になって――。
「なんでなの？　さっきの人、関係あるの？」
「お前には、……分からないよ」
「知りたいわ、教えて――？」
ジェンダー、だから？

「リアル・ベイブリッジには、モデルがいるの……」
「そう、なんですか。――気になります……」
私はあの頃、つぶさに見ていたから、隼人の気持ちが、どっか行っちゃってるのに気づいていた。
「あくまで、モデルだけどね……。隼人と、隼人の友人――」
これでも高校当時から、悲恋モノの名手って言われてたのだ。
「犯罪に手を染めたせいで、星時に決別されちゃうキルシュ――彼女みたいな凄い人が、いたんですか……」
あの会話で、私の予感が的外れじゃなかった事を確信したの。
「私は、書く事で消化しようと思ったの――。だって……、だって私は隼人を愛してるんだもの……！」

☆

京さんは、少し治まると、遠くを見つめて話し始めた。
「リアル・ベイブリッジには、モデルがいるの……」
「そう、なんですか。――気になります……」
なんてったって、京飛鳥オタなのだ。
「あくまで、モデルだけどね……。隼人と、隼人の友人――」
ずっと、京さんだとばかり思っていた。――タイプが違う気もしたけれど、……誰かを愛する姿勢は、似ている気がしていた。
「犯罪に手を染めたせいで、星時に決別されちゃうキルシュ――彼女みたいな凄い人が、いたんですか……」
「私は、書く事で消化しようと思ったの――。だって……、だって私は隼人を愛してるんだもの……！」
本格的に、泣いてしまった――。

やがて、面会時間が終わりに近づいた。
「今度Ｂ３ａｒｔｓで、沖浅先生の原画展やるの……あの空の騎士

のＳＦ！」
「わーいいなー、いいなー。観に行っても、いいですか？」
あなたがそうするなら、もちろん私は、合わせます。
「なんなら、オブジェ造り、手伝ってくれてもいいわよ？」
「ぜひとも！」
でも、我慢できなかった。泣く意味が、解ってしまったから――。
「納得、……していますか？」
京さんが、息をのんだ。そして――。
「なにも。……でも確かなのは、やっぱり。隼人が私を愛してくれたのは事実だったって事。そろそろ、解放してあげるべきかしら……ね」

☆

二月、ロンドン――。
十八年ぶりの大雪。交通機関も麻痺して、街中パニック状態だった。
私は一歳の時から、ボディガードの琥珀と、父方の祖父母のお屋敷で暮らしていた。
小さい頃はよく分からなかったけれど、パパとママが月に一度逢いに来てくれるのがとっても楽しみだったことだけ覚えてる。
少し大きくなった私は、ママの国について知りたくなった。そこでママが紹介してくれた‘ハヤト’と、文通してみたりした。
パパんちはよく分かんないけどお金持ちで、Ｗａｔｓｏｎっていう宝石商をしていた。
だからか知らないけど、私が十の時に、ママ……っていうか元はパパの持ち物だったガーネットのペンダントを譲り受けた。大事な物だ。
今では、……形見になってしまったのだけれど。
私にとって、一緒にいた時間が少なかったのにもかかわらず、い

たる所に両親との思い出があるロンドンにいるのは辛すぎた……。
私は日本にやってきた。
隼人と、その家族にも逢ってみたかった。――だって、隼人の話だと、とっても愉快な家族だったんだもん……。

日本に来て良かったと思う事の一つは、勿論、元気な京さんに逢えたこと。
もう一つは、そうね――。
「咲っ！　今度はどこ行きたい？」
「そうね、美味しいコーヒーが飲みたいなー」
空人が、噂よりずっと、テンダー・ハートの持ち主だった事かな？
「よっしゃ、どこがいっかなー？」
脳内で、サーチしてるみたい。

いつか飲めたらいいなぁとは思っていたけど、本当に、キーカフェのコーヒーを飲める日が来るとは思わなかった。
喫茶‘ふりむけばヨコハマ’、……まだあったらしい。感動だった。
「ここのコーヒー、昔は不味かったらしいんだけど、隼人が文句言ったらキーカフェのに、変わったらしいぜ？」
「そうなんだ……。隼人ってホントおっかしいね」
可笑しさと共に、何故だか涙が出てきた。
（パパ。ママ……）
ちょっと、しんみりしちゃったかな？
「――なあ。なんか、想い出話しろよ」
やっぱり、空人はやさしい。
「……うん。そうね……」
何がいいかと、考える。
「……そうだ。あのね、パパね、太陽系の小惑星を執念で見つけたのっ！　すごいでしょう？　97年に見つけたの！」
「へえ！　それはすげぇよ……名前は？　なんてゆーんだ？」

☆

夜ならば、特に、大さん橋のからの遊園地が好きだ。
「ここが、横浜が好きだ……」
同じ気持ちだった。
「キラキラしてて……綺麗ですよね――」
「んー。なんか、俺は昔のヤクニンと同じ気持ちで、此処を守りたいんだ」
恐らく、ペリーの時代の事を、……あの時代の税関は、日本の門番だった事を指しているのだと思った。
「ふむ。夢がでっかくて、良いと思いますよ？」
思わず、ちょっと笑ってしまう。
「ちょ、笑うな……」
なんだか、見られている気がした。首をかしげて見せた。
「最近、よく笑うのなー彼方！」
「え、……そうですか？」
自分の事だと、気がつかないものだ。
まあ確かに、仕事は順調だし、京さんは奇跡の復活を果たしたし、夜景は綺麗だし……。自分の病気以外は、まあまあハッピー、かも知れなかった。
「笑うのは、メンタル的にはいい事だ……もっと笑えっ！」
襲いかかる影。――鬼っ！
「え？　……えーっ！　～～～ひゃはひゃひゃ……ちょっと！　いい歳して、人をくすぐるの、止めて下さい！」
「歳はひでぇなー」
「自業自得です！」
ひとしきりウケた後、唐突に質問された。
「彼方、遊園地で何が好きだ？」
「えーっと。僕結構、絶叫系大好きなんですよ」

「へえ。確かに意外だな……今度、どっか行こうぜ？　今からでもいいしな」
「あー、ええ是非。……でも今日は止めときます。せっかく、綺麗ですし――」
見えなくなるのは、不安だった。
夜の遊園地はキセキや希望に満ち溢れていて……入ったら、きっと迷ってしまうから。
「歩くお化け屋敷はヤなんで、そこんとこ配慮して下さるなら……」
「あっはは。そーか」

☆

「今日か……」
やっぱり、緊張してるっぽかった。
「葉夜？　リラーックスよ！」
「はーい！」
あやめさんは、朝から元気だ。近くに、長身のあやめさんよりもさらに長身の美女がいると思ったら、なんと女装の男性で、あやめさんの彼氏だという。
（いーなー！）
少し外の空気を吸いに出た。よく晴れている。
ここはショーの通り近くの、控え室に借りた建物。通りの端には、出入りの為のスタイリッシュなブースも建てられていた。
「葉夜」
「あれ？　京さん、おはようございます。咲ちゃんと、琥珀さんも」
確か、二人はネズミーがてら、ヒルトンステイしている筈だった。朝早くここまで来てくれたのだろうか？
「忙しくなる前に、応援しに来たのよ。ハイ差し入れ」
「あ、ありがとうございますー。お二人もスミマセン、朝早く……」
「いえいえ！　私も楽しみにしてるんでー。ね？　琥珀っ」

「ああ。頑張れよ、なんだっけ……ハヤ？　隼人と似てんなー」
「あはは。ありがとうございます。――あの、つかぬ事をお聞きしますが、なんのスポーツをやられてるんですか？」
「んー一応軍隊上がりだし、格闘技も全般……かな」
（あれ？）
一言でバーンって返ってくると思ったら、案外ちゃんと答えてくれた。ちょっと、悪戯心が湧いた。
「人間関係とかけて成功と解く――その、心はっ？」
「……許すことだ」
海外暮らしらしい、素敵なスマイルまで頂いてしまう。
（うーん。クールだわ……）
正確には、失敗が抜けていたけど、構わなかった。

あかねーの、い～いなずけっ♪
控室に、何故か空人がいて、らんま1／2を見ている。――私に気づくと、声を掛けてきた。
「オレ、コレ見て空手やり始めたんだぜっ！」
「へぇ、そおだったのー？」
（……）
気づいてしまった。これって、究極的ジェンダーかも？　という事に。

☆

アッシュピンクがかったブラウンの髪をハーフアップにしている。ルビーのピアス、顔立ちは涼しげだ――。
彼がプリンスと呼ばれる、倉橋冬琉だった。
舞台袖で控えるチーフデザイナーの彼方のかわりに、ディレクターがてら進行までするのだそうだ。
『ハロー皆さん。倉橋冬琉です。本日はお集まり頂きありがとうご

ざいます！　――では、いよいよ始まります。
Ｅｄｇｅプレゼンツ。Ｙ１５０ヒストリカル・ビュー・ショー！』
海の日の午後、――盛況すぎて、そこら辺り一帯が寿司詰め状態だった。
空人は咲を誘いに行ったから、俺と京は久しぶりに夫婦水入らず、優雅にショーを眺めていた――税関が管理しているビルの屋上から。
「この場所……ありがたいわー」
「そりゃあ、よかった」
俺達は、行き着くとこまで行ったのか、かなり平和な関係になりつつあった。
「あ、始まったわ！」
京は葉夜と仲良くなったらしく、喜々としてオペラグラスまで持参している。
まあ俺は俺で、休日よろしく、職場関係の場所だというのにいづみ橋持参だった。……もちろん京の分も、つまみも。
どうやらトップバッターは、ロングヘアーがトレードマークのあやめさんだった。
『コスモコール・ルック。
大胆な幾何学的カットを配したワンピース、シルバーグレーがクール』
確かに、不透明なバイザーをしている。
近未来から、スタートらしかった。
『ブルー・ライト・ヨコハマを思い出させてくれるようなパンタロンスーツがドレッシー♪』
葉夜だった。パンツルック。
「あの髪の毛だと、すげぇ似合うな～」
続々とモデルが現れる――今のところ全て女性だった。
『四十年ほど前に流行した、フィット&フレアー。首もとのスカーフがエレガント』
『戦後のニュー・ルック！　後のＡラインに似て――』

やがて、一通り時を逆行し、そろそろ終わりかと思い始めた頃――。
また、彼女だった。
『あやめラスト！
バッスル・スタイル。ドレスの腰当て部分にシースルーのオーバースカートを重ねてます。全体がシャーベットカラーのグラデーションなのが、彼方のこだわりです――』
十九世紀にタイムスリップしたみたいなドレス、海の様な爽やかさがあった。
「いいなー、いいなー。私もあーゆーの着たい！」
「後で、彼方にお願いしてみれば？」
「そーしよっかな～？」
次は葉夜だと思ったのに、最後の最後に、男性モデルが二人現れた。
「……あれ、葉夜よ」
オペラグラス片手に、確信的にそう言った。
（……え？）
片方はトップモデルの萩、オーラが違うからわかる。――もう片方の少年が……葉夜？
『ラスト、ペリーの時代だよ。
愁には、ペリーと同じ時期の米海軍提督の夏服をアレンジしたものを着てもらったよ。シンプルで爽やかなホワイト、そしてゴールドの肩章がクール。――そうそう、ターンしてね。
お隣は……。ドレッシーなコートはチェスターテイスト。比翼仕立てのカラーにベルベットを配した細身のシルエットが美しい』
サングラスを掛けていた――それを投げ捨て、萩にコートを脱がして貰っている。
『――葉夜だよ。
プリムローズの黄色いエンパイア、パフスリーブがエレガント。ハイウエストで締めて、高い位置からくるぶし辺りまでなめらかだ……』

とても正統派で、見る者に全く嫌な感じを与えない。色のグラデーションと、過不足の無い刺繍がとても素晴らしかった。
（彼方っ）
「……！」
「隼人、よかったわねー」
音楽が変わった。さっきまでもファニーな洋楽だったけど、俺の好きな、ＰＳＢのＡ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　ｐｏｉｎｔ　ｏｆ　ｖｉｅｗに転調した。
『まだ終わんないから、みんな帰んないでねー！
さて、もともとゴシックファッションを得意とする望月彼方は、今季、赤白紺のトリコロールカラーを推す――。
　そして、オルタナティブより迎えた有馬美海はブライトカラーを多用した、セレブカジュアルを得意としてきた。……二人のコラボレーションだ。
これ以降はＥｄｇｅの最新コレクション、テーマはモノセックス！』
　ここからは男性モデル解禁らしい。
少しヒッピーテイストもありの、ユニセックスファッションに少し近い……その最新バージョンといった感じだった。
（すげぇな。お前は、こうゆう世界の人間なんだ――）

☆

ヒストリカル・ビュー以降、宣伝効果も相まって、オレの秘蔵っ子の葉夜も、瞬く間に売れっ子になってしまった。――まあ元々、ダイヤの原石みたいなのが、ひねくれてただけだからな……。
オレの父は、横浜に本社のあるＡＲＣＩＬＬＡ　Ｃｏ．　Ｌｔｄ．の取締役だ。全国規模で、大型書店とフラワーショップを展開している。
書店は祖父の代からあるし、都会の女性をターゲットにしたｆｌｏ

ｗｅｒ　ｐａｌａｃｅは、父が展開した。
今では僕がｆｌｏｗｅｒ　ｐａｌａｃｅの代表で、お花のスクールもしながら、新規事業を開拓している――。

最近身辺に滅茶苦茶ストーキングの痕跡があったから、すっぱ抜き予防の為、仕事帰りに葉夜が入り浸っているＢ．Ｂ．ｈｏｔｅｌに寄ることにした。
夏の夕暮れ時。オレはビールと、帝の作ったタパス片手に鼻歌交じりでここに来たのだ。
（げっ……）

☆

京さんはお酒に弱いのかもしれない……。
さっきからポラロイドを取り出しては、パシャパシャやっている。
「葉夜～スマイル！」
「ハイハイ」
パシャ
肩を抱かれて、一緒に写る。
京さんは笑って私にキスをした。あらあら。
パシャッ

☆

案の定、外から隠し撮りしている人影を発見してしまった。
「お前、何やってるんだよ……」
こいつは見覚えどころじゃあなかった。
オレが高校でシェークスピアの女役をやった頃からの、切りたいのにスクープを狙ってつきまとわれるという、非常に不愉快な関係だった。

「これはこれは、フラワープリンス？」
「真柴サンさぁ……。もう、オレ達張るのやめてくれないかな？
つまんないでしょ」
「いやァそれが、全然」
もう軽く十年位の付き合いになるのに、あの頃と変わらない、ナルシストな嫌な奴だった。
「チッ……。とりあえずネガ返せ」
「ハイハイ――で？
葉夜と彼方に関する、リーダーからのスキャンダルは？」
「ノーコメントだよっ！」
オレは、黙認派なんだっつーの！
「目障りだ。さっさと消えろバーカ！」

☆

『本当かっ！　本当に、ガンが消えたのか？』
「ああうん、そうなんですってば。ちゃんと、‘いくつか検査をして……’って、今言ったばかりでしょう？」
ちょっと、……いや大分暑い日だけど、気分は爽やかだった。
『――よかったな！　俺、今、滅茶苦茶感動してるしっ』
「あはは。オーバーですよ」
『嘘じゃねえよ！　愛してるぞー、彼方！』
耳元で、叫ばれる――。
めちゃめちゃ、テンションが高かった。
「何、バカ言ってるんですか――？」
海辺まで、あと少し。

☆

見事に葉夜の写真入りで、すっぱ抜かれた――。

■今一番！クールな葉夜と美女のキスシーン！■
◆◆‘Ｅｄｇｅ’にかかる、ゲイ疑惑◆◆

「ひどいな……」
雑誌を買ってきた帝だ――。でも言葉とは裏腹に、あっけらかんとしている。
（あ・い・つ～！）
カメラの両刀とか、マジ死ね！
「俺達は公然の事実だからいいんだよっ！　――でも、葉夜は違う……」
どうするか――。勿論、華麗に放置プレイという手もある。だけど、なんか葉夜のイメージとは違う。
オレにしては珍しく、考え込んでいた。その時。
コンコンガチャ
ちょっとした音速みたいに、素早く。葉夜が扉を開け閉めして現れた。
「葉夜？」
「お前！　どーやってここまで来たんだっ？」
うっすら、葉夜は執念でここまで来たような気はしていた。
「お願いがあります！」

☆

「ここに来るのは、久しぶりねー」
「そうだな」
また、二人で出歩ける事が嬉しかった。
「ここ、名前が変わったんだな……」
隼人が、懐かしそうに言う――。

‘ペリー’から、‘ペリーの庭で’に。
パンの美味しさはそのままに、リニューアルオープンしていた。
「私、アップルパイにしよーっと」
くすんだローズピンクの壁が綺麗な、開港資料館。
思い出の場所。隠れ家的な感じが好きだった。
「そのうち……、別れてあげるよ」
「――え？」
貴方から言い出したことなのに、淋しげな顔をするのは反則だよ？
「そろそろ、ステージアップだよ」
ね？　という風に。私、思わず笑顔が零れてる……。

「当直でしょ？　ここでいいわ」
「そうか……」
「そんな顔しないで」
やっぱり、少し寂しげな顔。まだ、離婚すらしていないのに！
「ずっと！　隼人が一番、かっこいいわよ……！」
やっと少し、元気になってくれた。
「京」
「――でも、葉夜ってナイトも見つけちゃったけどね！」
「……え？」
私達は、ひっそりと育った椨の木の下で始まって、――この下で終わるのだ。

☆

「二人もスクープされたぞ」
「こんなスキャンダルないぜ」
そうなのである……。
今回、葉夜だけじゃなく、オレの可愛い彼方までも！　微妙に絡んでるヤツを撮られてしまった。

本人に聞いてみたら「めちゃめちゃ、くすぐられてました……」っていってたから、多分そうなんだろう――。
今回は葉夜の申し出だったし、病み上がりの彼方は、向こう三年は仕事をセーブして与える予定でいる――。だから、オレの用意したこの記者会見場に現れるのは、葉夜一人なのだ。
（今日は、葉夜のバースデーなのに……）

暑い時間を避け、夕方。赤レンガパーク内の、Ｙ１５０で使われていない旧税関事務所遺構辺りに、仮設ステージを作らせた。
今夜の主役が現れた――。
あらかじめ、質問は制限してる――普段ロウ・テンションな葉夜には珍しく、今回は結構キレていたのだった――。
「今晩は。お集まり頂きまして、有難うございます。
早速本題ですが――、残念ながら私はまだ、京さんに対して好きだとかそういう気持ちはありません。
でも、もし仮にそうだとしてもいったいどうだっていうのでしょう？　人の気持ちはその人だけのものです。
人に迷惑をかけない限り……いえ、例え家族なりに迷惑をかけてしまったところで、それが罪ならば、いずれ自分に何かしら――私のイメージは罰とは少し違いますが――何かしらの形で跳ね返ってくるでしょう。
それすら、当事者の問題であって、周囲が裁く事はできない筈、です！」
葉夜はそこまで一息に言うと、ちょっと息継ぎをして続けた――。
そこに集まった記者以外の者のうち。――ファンの男性は葉夜に対してちょっと泣いて、相手の美人さにときめく者もいたようだった。
そう、何故か渦中の京さんは、少し離れた位置から葉夜を見守っていた――。
（えー？　マジで？）

これにはオレも、驚きだった。
女性ファンの大部分も、葉夜のぶっ飛んだ発言の数々に少し戸惑いながらも、概ね受け入れていたようだった。
一番困ったのは、コイツ。
「ふざけるな！　犯してやるッ……アイドルの癖に――」
延々暴言を吐いて煩いから、葉夜は「私はアイドルになった覚えはないです。あなたを軽蔑します」と、斬り捨てた。
これには賛成だ――。
「やだやだ葉夜ちゃん！　汚いよ！」
そういって喚いてる高校生には、
「ごめんなさい……。私も意見のある人間なの。あなたの理想を押しつけないで…ね？」
天晴れ……葉夜、いつの間にそこまで大人になったんだ――？
といった位、スマートな対応だった。
「わたしはっ！　……私は幸運な事にというか、今まで恋する対象は異性、且つ同い年で私より背が高いっていう、非常に狭い視野の中でした……けど、愛に人の定義みたいなものなんて必要無いのだと思う！　ってのが最近のまとめです。
きっと社会の秩序や、バランス上の話。
必要ではあるかもだけど、やっぱり押しつけないで欲しいってのが、今ンとこの結果です。以上！」
そう言って、葉夜は舞台上から降りようとした――が、
「さ・い・ご・に！　このバックの方で流れてる、Ａ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　ｐｏｉｎｔ　ｏｆ　ｖｉｅｗ　は、お気づきの方も多いでしょうけど、ショーでも流れてました！
‘ａ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ…ａ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ…’ここが、私は嫌いじゃないんです。クリスはそーでもないみたいだけど！
……だって、非常に重要だと思います。――よく、耳を澄ませて聴いてみてください。
宜しくお願いします！」

◆◆◆
オックスフォードにいるふたりへ

こっちにきて、1ヶ月以上経ちました。
お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、元気？
私はというと……、隼人さんも京さんも、理想のふたりでした。特に、京さん。元気な姿に逢えて、本当によかった。
あと、空人とも結構仲良くなって、最近よく遊んでます。
夢だった、ふたりのキーカフェのコーヒーも飲むことができました！
そうそう、空人に星の名前を教えました。‘ギムレット’。

ギムレットと言えば、私、なんで十八年目でやって来たのか、気になったから色々考えてみました。予想――
●ずっと見張っていたけど、少しの慈悲で、ここまで待ってくれた。
●ドラッグか何かで、発作的に。
●ギムレットにも、シェリー以外に大切な人が出来たのに、何かのきっかけで失って、哀しみに耐えられなくなってパパとママを……。

これ位しか思いつかなかったわ。
でも、これだけ考えられるって事は、私はかなり癒されたのね……。
もし、三番目の理由が正しい答えだとしたら――。私はギムレットを許してしまうかもしれない……とさえ思ったわ。
だって、誰もいないなんて、きっと耐えられないと思う。
違う視点の人と交流する事で、得る大事なものがあるから、人は

生きて行けるんですよね？
ちょっと、しんみりしてしまいました。

またすぐに、メールします！
☆Ｓａｋｉ☆

Ｆｉｎ．

ありがとうございました～！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3893i/

ＳＣＡＮＤＡＬＯ.U.S

2010年10月15日21時06分発行